

325

42

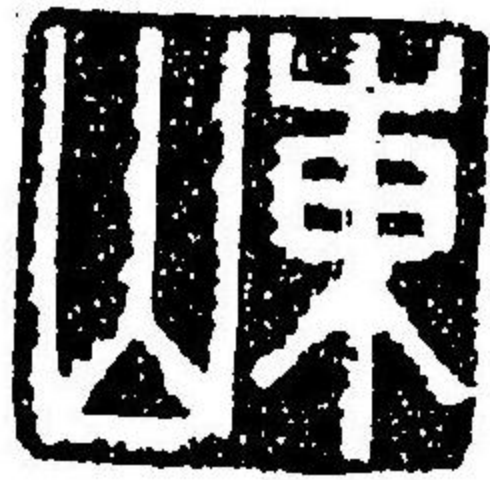
禪

幾

325-42



隨波逐浪



はしがき

此の茶話は記者が朝夕参禪の傍ら建仁寺院寮に於て親しく黙雷老師より聴き得たるものを一々紙衣に録し江湖求道者の爲にとて曾て京都日出新聞日曜文壇に「塗毒鼓」と題して連載したるものなり以て禪機縦横當るべからざる老師の面影を打偲ぶよすがともならん歟、

戊申正月

於名古屋 禿 毫 識

目次

- 一 鐵舟と得庵……………一
- 二 達磨西來の年代……………五
- 三 瓢中の座禪……………一〇
- 四 白紙の艶書……………三
- 五 活ける東京人死せる西京人……………五
- 六 太鼓の音を描く……………二
- 七 花見客に放屁……………三
- 八 茶味と禪味……………三
- 九 細君を忘れる……………一〇

十 明末の禪風……………

十一 極樂へ嫁入……………

十二 一升徳利の公案……………

十三 坊主頭にチヨン鬻……………

十四 夢窓國師と戀歌……………

十五 本尊は美人……………

十六 左邊底の故事……………

十七 日蓮の禪機……………

十八 何故これが圓い……………

十九 蚤と虱の禪機……………

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

廿 元亨以上の僧……………

廿一 坊主が社禰……………

廿二 耳根圓通の三昧……………

廿三 眞言宗の妻帯……………

廿四 糞ひつて悟る……………

廿五 阿呆になる修業……………

廿六 王冠と荷衣……………

廿七 大石良雄の禪機……………

廿八 慈視閣の風光……………

廿九 大根蕪の生命……………

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

一〇七

卅一 尊貴の参禪……………二四

卅二 生也死也馬鹿馬鹿……………二七

卅三 一筆申す火の用心……………二九

卅四 何をくよくよく川端柳……………三三

卅五 雷雪潭と寶洲……………三五

卅六 南天棒と一指頭……………三九

卅七 天狗の隠れ簀……………三三

卅八 白隠禪師の繪畫……………二五

卅九 鯖の頭の鑑定……………二〇

四十 娘島田は寝てとける……………二四

四十一 長は長短は短……………二四

四十二 萬疊青山隱古鏡……………二五

四十三 闇齋と景樹の禪……………二五

四十四 禪宗の四十六流……………二〇

四十五 禪とは什麼生……………二五

四十六 達磨の一句……………二六

四十七 建仁寺十勝……………二七

四十八 乾坤一擲の仕事……………二七

四十九 默雷禪師の偈……………二六

參禪餘錄

目次終

- 一 座禪の俳味……………一
- 二 草庵の禪趣……………五
- 三 花鳥……………九
- 四 薺の日……………一三
- 五 なかぬ人形……………一七
- 六 出産……………二一
- 七 建仁寺の臘八……………二七
- 八 徳源寺の臘八……………三三
- 九 俳句説法……………三九
- 十 俳偈……………四五

禪機

一、鐵舟と得庵

竹田黙雷述

床に紅一點の花椿、爐に沸々たる鐵瓶、默雷老師の舌頭、古聖  
 去り今人來る。若夫れ過つて之を聽けば眞にこれ塗毒鼓鳩鳥身。  
 オンタに話した事あるかも知らんが、彼の山岡鐵舟居士ナ、  
 あれは近世の居士ではなかつ、出來た人ぢやが、確か勝安房や其  
 他二三人連立つて、或夏の日、何處かの野道を通つた事がある、  
 スルト俄かに一天濃墨の如く掻曇つて大夕立が砂塵を捲いて降出  
 したので、サア夕立だ——と皆々雨傘の用意がないから狼狽して、

羽織を頭へ冠るやら袴の股立取つて走り出すやらの大騒ぎをする。其中に紫電一閃ガラ／＼と雷鳴がする。驚破と云ふ間もあらばこそ大きな奴がバリ／＼と附近の樹へ落ちた凄まじさに勝や其他は思はず桑原／＼と頭を抱え臍を押へて地上へへ々張つて仕舞うたが、鐵舟だけは其處へ突立つたまゝ、泰然自若として居る。雨霽れ雷歇んでから皆々が鐵舟に對つて君は偉い膽力だナと感心すると、鐵舟は莞爾と笑つて、イヤ乃公にはへ々張る暇も無かつたからナと云つたげな

鳥尾得庵居士が在世の折は、時々この僧堂へも遊びに見えたが、彼の得庵が何處かの激戦の際一方の隊長として彈丸雨注の下を突撃した事があつたさうぢや、其戦鬨なる時、血刀を引提げた一兵卒がツカ／＼と得庵の側へ來て、隊長私の首は未だあります

か、と尋ねたさうぢやが、此兵卒の一言は實に三昧に入つて居て大いに禪味があるよ、百姓が我を忘れ鉄を忘れ、商人が商戦に算盤を忘れ、アンタが細君を忘れる時は什麼ぢやらうナ、アハ、

海を見た事もない京都人などには解るまいが、海邊に住んで居る漁師などの話に、彼の磯輪へ寄せては返す波につれてボカリと浮いて來る貝ナ、アマガ寄せて來る時は必ず同時にパツと口を開いて寄せて來る、引く時も必ず同時に口を閉づるさうぢやが、同時に口を開き同時に口を閉づるとはなんと不思議ではないか。

得庵が何時も此堂の居士大姉達を集めて、彼の如意嶽の大文字は僧空海が書いたのだと云ふが、什麼して書いたのぢやらうサア言へ／＼と問ふて居たが、山を紙となし火を墨とする位の何でも



なささうなものぢや、鳩居堂の筆でも書けさうなものぢやナ。  
 建仁寺の門前に桶庄と云ふ桶屋があつたがこれは至つて正直な  
 奴でナ、毎日毎朝此室へ来て茶を飲んで行つたが今は故人だ、  
 襦じゆに私が死んだら何になると訊くから、ソリヤ牛になると擲なげ揄うふ  
 て遣つたら眞に受けてエーッと喫驚きつしやうしよつた、毎日毎日此室へ來  
 るので、偶に客のある時などは三應寮で一寸控えて居て呉れと頼  
 むと、ナニ清水の觀音様を見い、誰が參つても黙つてゐる、老師  
 にドンナ賓客があつても老師が活佛様なら此桶庄でも乞丐でも同  
 席を許して下さるに違ひないと、何と云ふても構はずサツサと此  
 室へ這入つて來た、面白い崎人ぢやつた。

## 二、達磨西來の年代

中外日報所掲某學者の「達磨西來の年代に付て」に對し老師の意見  
 を叩く、老師喫茶一椀、呵々大笑して曰く。

ナニ襦じゆが實の這入つた法螺を吹かぬとて中外紙上で東京の某學  
 者が怒て居るのが、アハ、法螺に實があればそれこそ大變だ、  
 實がないので東京三界までも鳴響いたのぢやないか、實があれば  
 已にこれ法螺ではない、法螺は實が無いので鳴るのぢや。

襦じゆが達磨西來の年代を碌々研究もせず漫然他の學者の所説を  
 杜撰呼はりしたのが悪いと云ふのか、ソリヤ實際ソナ餘計な事  
 を研究した覚えもなければ某學者の云ふ通り全然知らずして法螺  
 を吹いたのに違ひない、それが所謂實がない法螺たる所以ぢやな

いか、アハ、ハ、ハ、

併し識らず知らずに吹いた法螺なら寧ろ罪がなうて好からう、  
袴も先年チャン／＼帽を冠つて歩いて、小兒に石を投付られた事  
があるが、無知無心の小兒に對つて怒つても駄目だ、世に無知無  
心ほど強いものはないナ。

苟も禪僧として其祖師たる達磨西來の年代も知らぬでは濟まぬ  
と云ふのか、アハアハ達磨の事なら識らぬ方がイ、一體袴は知  
ると云ふ事よりも知らぬと云ふ事が好きぢや、知るは人間ぢや、  
知らぬが佛ぢや、其の本尊の達磨さへ梁武帝に對して朕が面前に  
在るは阿誰ぞと問はれた時、不識と一喝して居る、此不識の一句  
に深遠測るべからざる意味が籠つて居るが什麼ぢや。

余曰く、併し彼の某學者の所説なる梁武帝の時代には達磨支那

へ渡來せず、それより百年以前、即ち劉宋時代に渡來せり云々を  
以て眞ならしめば此不識の問答も亦自然抹殺せらるゝに非ずやと  
老師莞爾として曰く、

それで學者には困るのぢや、いつも死だ書物ばかりを證據に取  
るからナ、此活きた眼玉で以て達磨を見ねば駄目ぢや、某學者の  
如きは死達磨のみを見て、未だ活達磨に出會はぬから不可ぬ、何  
も達磨は只一箇ぢやない、古今無數の達磨が居るよ、それで古徳  
も一箇兩箇千萬箇と云はれたのぢや、一寸例を擧ても梁武帝と問  
答した達磨もあれば北魏の嵩山で九年面壁した達磨もある、又葱  
嶺で隻履を携えて歸竺した達磨もあれば我朝大和の片岡で聖徳太  
子と邂逅ふた達磨もある、されば又劉宋の時代に支那へ渡來した  
達磨もあるであらう、已に碧巖にも達磨亦是觀音と圓悟禪師の云

はれた位ぢや、百億分身で今頃洋行最中の達磨もあれば、ソレ此處に大法螺を吹いて居る達磨さんもある、アハ、ハ、ハ、

イヤ眞面目に云つても由來佛教に歴史は無いよ、印度もアノ通り歴史の無い國だし、支那と雖も、會昌の沙汰等三回も沙汰があつて、佛教の古典は悉く灰燼に歸した、それに數千年以後の今日の學者が多少の舊記古書に據つて如何して佛教歴史の大生命を把握せられやうぞ、此活眼を開かねば一生心身を勞苦しても只達磨のミイラも掘出せぬのぢや。

又達磨多羅の書いた達磨禪經を小乗と云ふたには違ひないが、ソリヤ同經を小乗と云はうが大乗と云はうが禪の見識如何に依るのぢや、禪は唯此達磨禪經ばかりでなく、時に臨み機に應じては一切藏經五千卷でも七千卷でも皆小乗と看做す事がある、併し又

時と場合には近松の淨瑠璃本でも一九の膝栗毛でも悉く大乘の經文と看做す事があるよ、此殺活與奪の權を失ふて什麼する。

達磨禪經の表題か序文位より讀んだ事がなからうと禪を罵つて居るのか、アハ、ハ、如何にも其通りだ、禪は平生ドノ書物でも經文でも祖録でも表題丈けより外見た事はない、序文見るのも既に遲臭いと思ふて居る、全部讀んで後に非ざれば其書物の内容が解らぬやうで什麼するか、開卷劈頭直ちに全部の大意を看取し得ぬやうで天地の活書を読む事は出來ないのぢや。

併し經文や祖録などは表題より外見ぬ代りに禪は平生如是經と云ふものを讀誦して居るよ、此經文は只一卷や二卷の小部のものでは無い、無量百千萬億卷もある浩瀚な活經活書である、禪はセメて此書物の表題丈けでも其の某學者を初め世の學者先生達に知

らせたいと思ふて居る、序文丈けでも教へたいと思ふて居る、此活經活書を讀破して而して後始めてドンナ達磨とでも自由に會談が出来るとのぢや、咄々只許老胡知、不許老胡會ぢや。

全體衲は三世の諸佛も容捨なく罵詈訾し、歴代の祖師をも遠慮なく誹謗するが、是迄一度も怒つて來た佛もなければ小言を云ふて來た祖師もない、それに某學者が怒つて居るとは其學者は未だ精神の修養が足らないと見えるナ、アハ、ハ、ハ、

### 三、瓢中の座禪

禪學は丁度瓢箪の中へ這入るやうなものぢや、最初は口が小さいので却々這入り難いが、漸と這入ると少し天地が廣うなつた心地がする、中程で又狭くなる、其の狭い中程の一關を透脱すると、

初めて兩岸の桃花を觀賞しつゝ、輕舟峽を出で、大湖に漕ぎ出づると云ふ概があるのぢや、併し又いつまでも瓢裡の風景を樂んで居ては尻が腐る、スグ此瓢箪も打碎かねばならぬ。

先年鳥尾得庵居士が壽塔を建てた時衲はお愛想の積りで彼の壽塔は何處やらに在つたのぢやナと云つたら、得庵は「ナニ最う忘れたのか」と云ふ、ソコ衲は「三たび天子に生れたので忘れた」と雲門の故事を以て答へたら得庵も微笑して居た、人間も籍を官員錄に列すると神通力を失ふからナ、丁度頃日の新聞にあつた通り後藤男爵が田中舍身居士を見忘れた話と一般ぢや。

此間帝國議會を傍聽した禪僧で、河野磐洲等に東京へ引張り出されて居る伊豫の禾山和尚ナ、アレハ却々の學者ぢや、王政維新の際舊物破壊の風潮と共に毀釋論の盛んに起つた時、京都に各宗

管長會議のやうなものを開いて其前後策を講じた事がある、其の時禾山は美濃井深の一雲水であつたのに、乃公出ですんば天下の坊主に何事が出来るか、と七寸の破草鞋を踏めて遙々京都へ遣つて来て遂に妙心寺に駐錫したが、乞巧のやうな一雲水の身で眼中紫衣の高僧を空うする處所謂貧は范丹の如く氣は項王の如しぢや、チト今日の青年にもコンナ氣慨が欲しいものぢやテ。

#### 四、白紙の艶書

玄沙の師備禪師と云ふのは或僧よりの手紙の返翰に只白紙三枚を封じ込んで送られたさうぢやが面白いナ、白紙の手翰が讀めぬやうでは宇宙の活書を讀む事は出来ぬ、ソリヤ吉野太夫の「忘れぬばこそ想ひ出さず候」も一寸禪味はあるがこれでも已に言葉が多う

過ぎる、今の鎌倉の宗演和尚が十八、祐が二十、二人とも未だ小僧時代の折、祐は之を真似して白紙の手翰を宗演に遣つた事がある、其白紙の手翰が讀めなんだ宗演も今は却々エライ者になつて居る、祇園美人にもチツト禪機を振ふて此白紙の艶書を嫖客に送るやうな妓がありさうなものぢやナ、アハ、ハ、。

伊藤春畝公は女に目も鼻もないと云ふ話ぢやが、禪僧にも公以上の好色漢があつたよ、それは美濃虎溪の潭海和尚といふてナ、最初武州永田の僧堂を董じて居た人だ、勿論維新草創の際の事で僧堂の金を横濱あたりの遊廓に貸付けて居たが、一向催促しても償却して呉れぬので、遂々和尚が直談判の上金が返せにや美人を一人寄越せとて、其の茶屋から藝妓を一人僧堂へ引張つて歸つた、それから後は片時も藝妓を傍離さず、廁圍へ行く時まで伴れて

行つて「おいへこの先が歪んで小便が散る、眞直に持つて居て呉れ」  
 杯と大衆の面前でも誰憚らず吩咐ける、其の藝妓こそイ、役ぢや  
 が、後年虎溪に坐つてからも絶えず年増の一美人を侍らして居た  
 が、或日酒を飲む時折ふし其の美人が外出して酌をする者がない  
 ので、ソナナラと信女の位牌と差向ひで酒を飲んで居たさうぢや  
 が、流石の春畝公も此潭海和尚には叶ふまいよ、アハ、ハ、ハ、  
 今は故郷土佐へ歸つて居るが、元裁判官で徳弘時輩と云ふ時人  
 があつた、仙人になる志願で有ゆる仙書を蒐集したり白川の奥山  
 に入つたりした男ぢやが、いつも赤跣で歩いて居る、ナゼ赤跣で  
 歩くかと聞くと、赤跣で歩いて居ると仕舞ひに足が靴のやうに固  
 くなる、猫や犬の足が證據ぢやと云ふ、其後此室へ來て最う仙人  
 を廢めましたと云ふからナゼ廢めたかと聞くと私が仙人になつて

も妻や子が仙人になりませんと云ふ、才氣煥發した男で却々の崎  
 人ぢやつたが、或日石地藏一體を自宅の庭へ安置して居るので何  
 をするかと尋ねると天下一人の語るべき者が無い、それで石地藏  
 を朋友にして居るのぢやと云ふて居た。

### 五、活ける東京人死せる京都人

老師所藏隱山和尚の書幅に「活盡死人死盡活人」との偈句あり、老  
 師之を床間に掛け且曰く、此最初の句は死せる京都人の靈藥、次  
 の句は活ける東京人の毒藥ぢや、イマ之を大にすると一は東洋人  
 の靈藥、二は西洋人の毒藥ともなる、兎に角京都人は餘り死に過  
 て居る、東京人は餘り活き過て居る、即今ドチラにも此砒が必要  
 ぢや。

獅子は獅子、狐は狐ぢや、狐が什麼に獅子の皮を冠つて其の獅子吼を學ばんとしても、コンコンとより外聲が出ない如く、世の所謂學者輩が徒らに文字の上から禪を學ばんとするのは丁度狐が獅子たらんとする類ぢや、夜をこめて鶏の空音ははかるとも世に逢阪の關はゆるさじ、「此清少納言の戀の關所の如く臨濟の關門も亦容易く透脱する事を許さずぢや、相似の禪を許さずぢや、參禪の學者に三つの差別があるよ、之を象馬兎の水を渡るに譬へる、水深に徹底せずんば止まざるのは象、水中を游泳するのは馬、淺く水上をチャブ〜と行くのは兎ぢや、イヤ兎でもイ、水を渡るのは即ち水を渡るのぢやからナ、

妙心寺の開基關山國師は東海道を廿一回も往復せられた人ぢやが、或者がアノ時、じきに白雪の降る不二山を御覽になつたかと問

ふた時、國師は不思議さうな顔をしてナニ東海道にソナ名山があつたのか一向禱の眼に這入らなんだかと答られたさうぢや、學者もこゝまで三昧の妙處に入らねば駄目ぢやテ、

不二山と云へば白隱禪師の和歌にコンナのがある、「日本にすぎたるものが二つあり駿河の不二に原の白隱」禪師は我が已墜の禪風を扶起した人で之を駄法螺とばかり聞いては眉鬚が墮落するよ、關山國師が未だ美濃井深の山中に座禪して居られた時、土地の百姓等は唯だ名も無い一雲水とのみ思ふて居た、スルト妙心寺建立に付大燈國師の推奨で勅命を以て召され、白馬朱傘の使者が遙々此井深の山中まで來たので、皆々初めてソナ偉い坊さんであつたかと呆れた、中にも平生國師に瓜や茄子を贈つて居た或老夫婦は隨喜の涙を流して其出立せられる前夜國師を訪ねて懇懇に説

法を乞ふた、スルと國師は物をも言はず老夫婦の頭と頭を鉢合せにゴツツリと打合すとイターイト云ふ、すると國師はソレソノ痛いのが此上もない有り難いことぞと云はれたが、此老夫婦はこのゴツツリで悟つたさうぢや。

それは當時已に花園の玉鳳殿はあつたが、妙心寺としては未だ一字の茅舎に過ぎなかつた、それでいつも降雨の際ポト／＼と雨漏がする、これも或雨の日のことぢや、關山國師は大聲を揚げてサア受ける物を／＼と二人の雜僧を呼ばれた、スルと聲に應じて一人の雜僧は盃、一人の雜僧は箆を持つて來た、國師は盃よりも却て箆を持つて來た雜僧を褒めて、箆ぢや／＼イ、物を持つて來たナ。

前にも一寸話をして玄沙の誦備禪師は廣東の漁師の兒である、

或日親父に伴はれて魚籃の番をして居たが、親父が獲る魚を禪師がスグ逃して仕舞う、親父の漁師は一生懸命に綱を打つて最う大分獲れた頃と魚籃の中を覗くと獲つた筈の魚が一尾も居ないのでサア什麼したと怒鳴ると禪師は殺生しては可愛想ぢやから皆逃して遣つたと答へられた、それで親父も此兒は迎も漁師の跡繼にはなれないと出家させた、此禪師が出家後、廣東より閩嶺を超えて行脚の途中、山路の石に躓いて生爪を剥した刹那アツ痛い／＼と豁然大悟して直に行脚を止めて跡戻りをした。

唐の玄宗皇帝が安祿山の亂に會して蒙塵せられた時、其總興の金鈴が三郎郎當々々々々と鳴響いたさうぢや、三郎とは玄宗の諱、郎當とは零落したと云ふ意味ぢや、三郎郎當々々々々と鳴響いた處に禪味があるよ。



孤峯頂上に立て或時は雲霄を望み、或時は十字街頭に和泥合水すと云ふ事がある、此の境涯が大事ぢやが解るかナ、ソレ今落草して馬糞牛糞に對して居るのぢや、アハ、ハ、ハ、

先日東京月溪寺の華嶽和尚が此室へ來ての茶話に、アノ有名な釋元恭は此華嶽和尚の法弟ぢやさうで、支那地方で神變不思議の偉人と崇められて居るのは此真物の釋元恭の名を騙つて居る福岡縣人日種令正と云ふ別人の細工ぢや、これは縦横機才のある男で、これが又幾人も釋元恭の影武者をばうて居てアンナ天狗の眞似をして居るとの事ぢや、京都人は知るまいが、其化物の釋元恭の根城は此京阪地方の何處かに在りとの事ぢや。

## 六、太鼓の音を描く

筑前博多の聖福寺に仙崖和尚と云ふのがあつた、これは現住の東瀛和尚から四代以前の名僧で、或時心易い某畫家に一寸此唐紙へ太鼓の音を描いて呉れんかと乞はれた、スルト畫家は太鼓の音とは難題で逆も繪になりませんと大に窮した、和尚は太鼓の音位が描けんで畫家と稱へられるか禱のやうなホンの素人繪を稽古する者でも太鼓の音位は何でもない、ソレ見よとて即座に唐紙へ槍一本を描いて、什麼ぢやこれが太鼓の音ぢや、天突くくぢや、アハアハと哄笑一番せられたので、畫家も思はず其機才に心膽を寒からしめたとは面白いナ。

現住の東瀛和尚も亦却々得難い器で、禱の建仁寺に坐る時も此

和尚に伴はれて来たのぢやが、當時祇は管長など、云ふ大責任のある位置に坐りたくは無かつたので、道々東瀛和尚に向うて和尚こそ建仁寺とは浅からぬ因縁もあれば先づ管長にならるゝが順當ぢやと云つたら、和尚は喫驚したやうな顔をしてイ、エ頭を掉り乍ら祇は東福寺の管長ならばお受けをする、他は眞平御免ぢやと至極眞面目に辭退せられたのが可笑しかつた、ナゼかと云ふとそれは東福寺の開山聖一國師は眇で、此東瀛和尚も眇ぢやからナ、自らも聖一國師を以て任じ他も斯う緋名を付けて居たのぢや、  
 八識とは眼、耳、鼻、舌、身、意識、摩那識、含藏識の八識を云ふので、摩那識は又辭送識とも稱して六識を含藏識へ轉送する役目を持つて居る、座禪は即ち此八識を打破する方法に外ならぬので、寂光淨土とは此八識打破の心地の事、八識打破の三昧に入

ればソレ此通り滿身光明赫灼として手も足も毫光ならざるは莫しぢや、作し此毫光は明い毫光ぢやない立い毫光ぢや。  
 打落帝釋冠、却是山箒、善い事も悪い事も一掃するのが此寒山箒ぢやが、一切の塵埃穢垢を廓清して後は乃ち此寒山箒も無用である、此時帝釋冠無し寒山箒無し而して後帝釋冠有り寒山箒有りぢや、所謂四種の與奪、臨濟の四料揀も之に外ならぬのである。

### 七、花見客に放屁

祇は昨日美術展覽會を觀覽して歸途、圓山の絲垂櫻を一見したが、其花見客の仰山なこと、何故コンナ櫻花の爲に滿都の士女が斯くも狂奔するのか實に馬鹿な奴ぢやと思ふた、櫻花は未だしも錢儲けをするから伶俐いが、之に浮るゝ人間は馬鹿の骨頂ぢや、



ア、すつぱりと魔軍を奉天府へ掃蕩して仕舞ふたと安心したる時は、早や藕絲孔中から露助と云ふ魔軍が金米糖のやうに角を出して居る。戰國時代でも平和時代でも、兎に角油斷は大敵ぢや、イヤ學者が坐禪をする上にも此用心が肝要ぢや。

## 八、茶味と禪味

茶と云へば茶は却々禪味に適ふて居る。床に公案の書いた軸を掛け、瓶に新しい花を活けて、斯うグーッと一息に飲み干した趣きは所謂「一口吸盡西江水、洛陽牡丹新叶葉」ぢや、それから何でもないやうぢやが、此茶碗を次から次へ経行さす上にも言ふべからざる禪味があるよ、又軸は繪などよりも公案を記した書に限るし、花はこぶしでも佗助でも只一輪で好いな、これ一華開いて天下の

春を知るぢや。

書幅の表装も紙で結構ぢや、真中の書が眼目ぢやから別に邊幅を飾る必要がない、表装に絢爛を極むるのは利慾を目的とする骨董家の事で風流清淡な茶家の事ではないよ、衲は先年水本と云ふ裁判官に「茶味禪味、味味一味」との語を書いて贈つたが、其人は其人格の點に於ても少しも邊幅を飾らぬ人物で、當世の所謂紳士のやうに真中の眼目其人格は何れでも好い、唯だ絹布や金時計で身體の表装を立派にさへすれば好いと云ふやうな賈物ぢやなかつた、兎に角風俗の奢侈は相戒むべしぢやナ。

茶の法式は秩序整然一絲亂れざるものぢやが、其極致に入ると無法の法、即ち亂れと云ふ妙處に至るが如く、座禪も亦出來上つた曉には千七百の古則公案も凡て大捨して忘れて仕舞う、こゝに

於て始めて縦横自在の働が出来る乃ち菩薩の境涯に入るのぢや、  
 今日には鳥尾得庵居士の三年忌に相當するので、左邊室の床には  
 維摩の像を掛けて置いたが、維摩は居士の親方、得庵も亦居士の  
 親方を以て自任して居た人ぢやから丁度追悼の意になつて面白か  
 らう、此維摩は不二の法門を説いた居士で、文殊が什麼かこれ不  
 二の法門と問ふた時、維摩は黙々として無言を守つて居た、こゝ  
 が維摩の一黙と云つて宗門に入釜しい處ぢや、此維摩の一黙は唯  
 だ徒に黙つて居るのぢやないぞ。

茶室には襦の描いた鼈鼻蛇と得庵居士の書簡が軸にして掛けて  
 ある、それは去る己歳の正月ぢやつた、襦が會下の居士大姉達に  
 向つて若し此鼈鼻蛇に喰はれたら什麼して此正月を迎へるかとの  
 公案を出した時、それを得庵が聞き傳へてソリヤ面白い私にも是

非其鼈鼻蛇を描いて呉れとの事で描いて贈つたものぢや、書簡は  
 之に對する得庵の禮狀であるが、得庵も遂に此鼈鼻蛇に喰はれて  
 仕舞うたのぢや。

此間支那地方を漫遊して歸朝した藤村會山と云ふ南畫家がある、  
 これは七八年ばかりも此寺の僧堂で座禪して居た畫家ぢやが數日  
 前東京博覽會の出品繪畫を一覽して來ての批評に曰く、ドノ出品  
 繪畫を見ても悉くこれヨウ描かう、と云ふ風が仄見えて駄目ぢ  
 や、竹内栖鳳のヴェニスノ月、山元春舉のロッキー山の雪は知ら  
 ぬ外國の風景ぢやから批評は止めとして、都路華香の吉野の花は  
 花ばかりで山がない、あれでは吉野山になりて居ないなど、批評  
 して居たが、華香に云はしたら亦其花ばかりの處に一見識がある  
 のかも知れんナ。

## 九、細君を忘れる

これは誰でも知つて居る話ぢやが、昔魯の哀公が孔子に對はせられて、朕の臣下に宿替をする時細君を置忘れた者がある、天下これ以上の健忘はあるまいと仰せられて哄笑せられた、スルと流石は孔子ぢや、透さず遣つた、イヤ細君を忘るゝ如きは未だ以て珍聞とするに足りませぬ、彼の殷の紂王は自分の心をも忘れしに候はずやと暗に哀公をも諷諫したとの事ぢやが、今日と雖も猶且家庭の細君を忘れて花柳の美人に心酔する者あれば、國家を忘れて黄金の私利に醜醜たる者もある、滔々として皆其心を忘れて居る者ばかりぢや、乃で我が臨濟の座禪は其の心を忘れさゝぬやう、正念相續の公案を興て、兔の毛の油斷も隙も許さぬのぢや。

例へば古の武士は大小を二本差して、大は時に身邊を離す事あるも、其小は護身用として滅多に腰間を離さぬ、座禪の學者も亦此通り常に八方に敵を受けつゝありとの心地で、不斷に公案と云ふ寸鐵を肌身離さず持つて居る、即ちこれ正念の相續に外ならぬのぢや。

心に油斷がないと頓智が得られる、頓智は一種の禪機ぢや、昔二人の雛僧があつて一人は此靈洞院のやうな寺の雛僧で、一人は向うの靈源院のやうな寺の雛僧ぢや、或日の朝靈洞の雅僧が竹箒を持って門前を掃除して居ると靈源の雛僧が豆腐買ひに通懸つたので靈洞の雛僧が『ドコへ行く』と問ふた靈源の雛僧は『足に任せて』と意外の答へをしたので、一方はグツと二の句に詰つた揚句、今度は師匠の和尚の智慧を借つて『足に任せて』と答へよつたら『足無き時什

麼生』と問ふて遣らうと待構えて居た、スルと其翌朝『ドコへ行く』と問ふても『足に任せて』と答へず『風に任せて』と言捨て、サツサと行く、此次こそ『風無き時什麼生』と遣つてやらうと思つて居ると今度も亦思ふ壺に陥らず『ドコへ行く』『豆腐買ひに』と前日と異つて返辭をして行つて仕舞うたが、これ一方の雛僧には機先を制する頓智があつて却々油断して居ない、殊に最後の『豆腐買ひに』には深遠な禪味が籠つて向上越格の人と雖も容易に言へぬ一句ぢや、凡そ天下の事も此問答と同じく豫め計畫した事に碌な結果は得られなから、難局に出會ふ毎に虚心坦懐、臨機應變に遣る仕事の方が、却つて天真爛漫で良結果を得られるやうに思はれるナ。

納が先年江州へ巡錫した時、見て一番驚いたのは太鼓の大きい事ぢやつた、江州到る處の村々には必ず一つづゝ太鼓堂と云ふも

のがあつて、其太鼓の大きい程が村の自慢で、太鼓の大きさに従つて村の人の心も大きいと云ふ勘定ぢや、嘘云ふなら此左邊室一ぱい、酒屋桶よりも大きいのがある、而して此太鼓の皮は天津の車の皮を剥いで張るとの事ぢやが、何故袴が太鼓を見てソンナに驚いたのかと云ふに、昔から禪坊主が修業に骨折らず、布施ばかりに飽いて居ると、今度死んだら天津の車牛に生れ變ると云ふ諺があるのだ、ア、袴の背中の皮をアンナに太鼓に張付けられるのかと、それで慄然として驚いたのぢや、雛僧の時に聽いて骨髓に徹して居た事を想出した故ぢや、アハ、今は天津の車牛などは何處へ行つたやら、アンナ大きな牛は一向見當らぬやうぢやが。

## 十、明末の禪風

黄檗の開山隱元禪師は多少宗旨も出來た人ぢやらうが、寧ろ念佛の人ぢや、それは明末の禪風と云つて、雲栖株宏和尚と云ふ當代の名僧が、末世の坊主には到底座禪などは出來ぬ、其機根に随つて念佛唱名をさすに如くは莫しとて念佛を公案の中に加へられた、之を明末の禪風と云つて隱元は此雲栖和尚の流派である、殊に隱元渡來の時代は日本の禪風も亦た明末の餘弊を受けて命懸け絲の如き危さで、關東地方の禪寺には悉く念佛堂が出來て居ると云ふ有様ぢやつた、乃で白隱禪師が現はれて其霹靂舌頭の觸るゝ處、念佛などは我が禪宗の英氣を挫くものぢや、此雲栖和尚の如きは少しく文字を解する底の瞎禿奴に過ぎずと毒罵して居る、白隱禪

師は凡て此銳鋒當るべからざる口調で當時己墜の禪風を振起した人ぢや、

併し雲栖和尚の著はした『禪關策進』と云ふ本は是非座禪の學者は一讀する必要がある、これは白隱も推奨して居る本ぢや、唯だ其中の念佛を勧める公案のみは白隱も之を削つて仕舞はねばならぬと云ふて居る、何故念佛が悪いと云ふのか、それは我が臨濟でも佛を拜まぬ事はない、併し能信と所信は不二、佛を拜むは即自己を拜むのぢや、釋迦何者達磨何者ぢや、他力念佛を頼むやうな弱音は吐かぬ、それで衲も世人を愆らす虞があるので、此建仁寺の伽藍堂を閉鎖して誰にも參詣さぬやうにしてあるよ、『春彼岸誰も參らぬ健仁寺』ぢや、アハ、ハ、

昔一匹の古狸が、此頃のやうな朧月夜のことぢや、村の三郎兵



衛と云ふ百姓の裏戸へ出て来て『三郎兵衛あんぼんたん』と擲擲ひよるのを三郎兵衛が聞付けてハ、ア狸の悪戯ぢやナ、ナニ狸位ゐに負けるものかと『左様いふものがあんぼんたん』と徹夜あんぼんたんの根競べをしよつた、スルと狸の方が碯と沈黙して仕舞うたので、コリヤ不思議と壘朝裏戸を開けて見ると狸が死んで居る、ツマリ根負けをして死んだのぢやが、これ人間成功の道も亦唯だ精根が第一義と云ふ例話ぢや。

仙崖和尚がコンナ○(圓相)を描いて其下へ十三七つと贅せられた軸がある、これは彼のお月さんいくつ十三七つと云ふ子守唄の意味ぢやが、此お月さんは何を指してあるのか解るかナ、十三七つは普通の年齢をかぞへる數字ぢやないぞ、無数の數、數學の原理根本が喝破してあるのぢや。

## 十一、極樂へ嫁入

至誠鬼神を動かす、人情の自然に流露したほど尊いものはない、或一人娘を死なした老婆があつたが、其京人形のやうな亡骸に犇々と抱き付いてワツ〜と慟哭して居た所へ、淨土か眞宗か檀那寺の和尚さんが遣つて来て、慰め顔に『極樂へ嫁にやつたと思や濟む』と諭した、スルと老婆は『思や濟めども〜』と愈よ泣きくづをれたと云ふが什麼ぢや、此『思や濟めども〜』には祖師も窺へざる妙處がある。

白隠禪師の會下には女子に伶俐俊發な者が多かつた、中にもおさつ婆は其隨一で、娘時分から天然に禪機を得て居た女ぢやつた、其家は日蓮宗でいつも佛壇に法華經の經箱が飾つてあつたのを或

日おさつがそれに尻掛けた所が、兩親は「ア、勿體ない罰が當る」と叱付けた時に、おさつはフ、ーンこれが法華經か、お経もお尻も同じことぢやと平氣で居るので、有難屋の兩親はサア娘が發狂したと心配した揚句、白隱禪師に相見し其の由を話すと、禪師はソリヤ面白い、ソナラ此和歌を與へるから床の間へ掛けて娘を試して見るがイ、とて作られたのが即ち「暗の夜に啼かぬ鶉の聲聞けば生れぬさきの父ぞ戀しき」と云ふ和歌ぢや、スルと果しておさつはこれは阿誰の和歌かと問ふた、兩親は原の白隱禪師の和歌ぢやと答へるとフ、ーン妾の腹と一緒にやナと云ふたのが因縁で遂に白隱の會下となつたのぢや、此のおさつは支那の無鹽ソツチ除けの醜婦、色黒のでぼらんぢやつたが心は西施も及ばぬ美人ぢやつた、其愛孫を失ふた時聲を揚げて啼泣したのを悔みに來た人達が、お

さつ婆さんは座禪して居ながらアンナに愁歎するのは腑に落ちぬと誹つた所がおさつは之を聞いて、妾は座禪をして居るので尙悲しい、併し妾の涙はお前達の涙と涙が違ふ、滴々玉を成して居る、亡き孫には此涙が千僧萬僧の供養よりも功德になるのぢやと云つた話があるが面白いナ。

師家が講座の上で歴代の祖師を罵倒するのは決して罵倒にならない、臨濟の打爺拳と云ふて自分の兩親でもブン撲るほどの獅子兒が出来ねば駄目ぢやが、之と共に此打爺拳を持つて居る臨濟和尚は有名な孝子であつた事を知らねばならぬぞ。

こゝに酒道樂の放蕩息子があつて、父親は年百年中之を心配して居た、或日のと例の如く酒氣芬々として深更に歸宅して、暗がりて寝て居る父親の禿頭に躓いた時、ア、勿體ないとお辭儀をし

たのを父親が聞いて、伴も餘程改心して呉れて嬉しいと、翌朝床を離るゝとスグ伴に對つて『お前は昨夜お説教でも聴きに行つたのか』  
『ナニ、ソナナ物を聴きに行くもんか』と邪慳に云ふ『それでも私の頭に躓いてア、勿體ないと謝罪つたが、餘程改心して呉れて嬉し』と涙と水涙を流して喜ぶと伴は『フ、ーン、昨夜のはお前の禿頭ぢやつたか、ソナナ最と酷く蹴つて遣るのぢやつた、己は又一升徳利に躓いたのかと思つた』と答へたそうぢやが、ソナナのが眞箇の不孝兒で、我が臨濟の打爺拳と之を同一視しては眉鬚が墮落する。

## 十二、一升徳利の公案

此一升徳利で想ひ出したが、衲が隨身して居た肥前平戸雄香寺

の釣叟和尚と云ふのは却々の酒豪で、其後住の菅嶺和尚も亦之に劣らぬ酒好きぢやつた、或日菅嶺は一升徳利に伊丹酒一ばい貰うた嬉しまぐれ、師匠の釣叟にも見せて喜ばせやうと、大急ぎで廊下を走つた端的中庭へ踏み外してドツと尻餅を突いた、大抵の者なら徳利を割る處ぢやが、菅嶺は自分の怪我は顧みず徳利丈は無事に持つて居た、こゝまで酒三昧に入ると、一升徳利も公案になるよ。

トロトロトロ、これ何の音ぢや解るかな、アハハハ、甘酒をあける音ぢや、トロトロトロ、これ何の音ぢや解るかな、肥汲む音ぢや、音はトロトロトロの外何もないが、甘酒と思へば甘酒の音肥汲むと思へば肥汲む音に聞える、又獅子吼と聴けば獅子吼にも聴えるのぢやが、ドロトドロトロ、これ座禪の只真中ぢやぞ。

臨濟の禪風は五逆罪を犯して雷電に撃たるゝが如く、雲門の禪風は九重門前に錦旗の翻翻するに似たりぢや、サア此禪風を微細に窺知せねば到底劈頭機を奪ふ底の仕事は出来んぞ、左様ぢや、座禪の學者には臨濟録、無關門、碧巖集、これだけ座右に備えて居ればイ、只これだけでイ、

黄檗の僧侶は皆鬚髯を生えして居るぢやらう、あれは支那僧の眞似ぢや、大體黄檗僧侶には持物が多いよ、鬚髯を生えして、如意を持つて、中啓を持つて、珠數を持つて、其上に寺を持つて、お負に未だ燗まで持つて居る坊主があるが、嚙ぞ重たい事ぢやらうと餘所事ながら心配して居るよ、アハ、

夜更けて飢鼠燈臺に觸ると云ふ句があるこれは學者が座禪三昧に入つて居る時、チラチラと昨日の事や一昨日の事などが心に浮

ぶのを指すのぢや、又鼠錢筒に入て技已に窮まると云ふ句がある、これは什麼に伶俐な鼠でも其鋭い牙を施すに所がない、即ち學者が進退維谷る難處に到つた事を云ふので、彼の白隱禪師が口癖の雲助歌「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」と同意義ぢや、苟も座禪の學者は一度は鼠技窮し越すに越されぬ大井川の難處即妙處を透過せねばならぬ、此難處を経ねば座禪も未だ迷ひと云ふて好い、阿波の鳴戸を越さぬ鯛は、眞箇の旨味がないのと同じく參禪の蜻連中に於ては尙更の事ぢや、アハ、

最一つ鼠の話ぢやが、先年此左邊室の鳴居の上をチヨコ〜と鼠が白晝でも往來しよるので、衲は其の通路へ暖簾のやうに白紙を垂らして『碩鼠々々技倆什麼生』と樂書して置いた、スルト鼠先生、碩鼠々々技倆什麼先生とは我々鼠族を馬鹿にした言事ぢやナニ糞

ツと、押し通らうとしてもフーワリ頭に白紙が冠さるので、忽ち東西南北の方角を失して踏躑逡巡、遂々鼠の方が根負けをして出て来ぬやうになつたよ。

禪機を古來無字劍とか吹毛劍とか劍に譬へてある、箭新羅を過ぐ、劍去て久しとは遅臭い事を云ふのぢや、此劍はスウーと知らぬ間に人を切て居る、恰で蜂が牡丹の蜜を吸取つて、而も些しも花を損せぬやうなものぢや、それに相手の人間は首無しで物を言ふて居るから可笑い、禿は斯うして日々満都の市民を殺したり又鳥邊野の死屍を活したり、殺活自在ぢや。

禪宗五派中の法眼宗を立てた法眼和尚と云ふ歴々がある、晩年の田舎の草庵に安居して芋堀坊主のやうな顔付をして居た、丁度冬の寒い日、偶々通り懸つた四五人の雲袂が、ドーカ焚火をさして

45  
案公の利徳升一

呉れよとて草庵に入つて来て、焚火に煖りながら華嚴の三界唯心が如何の法相の萬法唯識が如何のと頻りに其博識を銜ふて居た、黙つて爐邊に之を聽いて居た和尚はアハ、博識の雲袂達ばかりぢやが、ソナラ其庭の石は心の中に在るか心の外に在るか解るかナと猫を冠つて穩和しく一本遣つた、すると一人の雲水が心の内にあると云ふと法眼が云はれるにあゝと苦勞じやそんな重い物を腹に入れて行脚するとはと笑はれた名もない芋堀坊主と思つて居たのにエライ事をイ、よるナと瞠目したが、遂に法眼和尚なる事を知つて皆其會下になつたそうぢや、此石は心の中に在るか心の外に在るか、若しアンタなら什麼答へる乎。

## 十三、坊主頭に、鬻

白隠會下の遠翁和尚は最初醉翁と稱して酒の好きな人ぢやつた。未だ其雲納時代に伊勢淺間山金剛證寺の大會に行つての歸途大勢の雲納達と一緒に神宮參拜に出懸けたが、當時坊主が神宮へ參拜するには今の附鬻のやうに坊主頭にチヨン鬻を乗せて行かねばならぬので、山田の町々には此チヨン鬻を賣つて居たものぢや、これは昔弘法大師が神宮參拜の時、天照皇大神が態々大師を出迎はれたと云ふので、以後僧侶の參拜は神慮を煩はすと多しとて、必ず坊主頭にチヨン鬻を乗せねば參拜を許されぬ例になつて居た。處が遠翁和尚は坊主は坊主で好い、チヨン鬻を乗せて俗人の眞似をするのは面白くない、と和尚だけは坊主頭のまま、大勢に紛れて

參拜した之を神官が見付けて段々大會のあつた金剛證寺へ懸合ふても何處の雲納の所業か判らず、何分大勢の中ぢやからと云ふので其儘濟んだとの話ぢや。

此伊勢から駿河へ歸る海上で、風波の爲に遠翁和尚の乗船が難破して、他の乗合の雲納も悉く海底の藻屑と消えた、スルと七日程経てから漁師の引網に大きな一匹の蛸が羅つた、ソラ大きな蛸ぢやと網を引揚げて見ると一人の坊主ぢや、未だ全く絶息せるやうにも思はれんで、濱邊に沙木を焚いて暖めたりいろ／＼介抱に手を盡すと旋て蘇生したのが遠翁和尚で、七日間も海底で座禪三昧に入つて居たお蔭で助かつたものぢやが、道力もこゝに至ると偉いものぢやナ、併しコンナ大器な和尚でも猶且揀擇があつたと見えて『嫌いなものは象眼獅子鼻毛なし足汁くひ看經彌左衛門』と云ふ

て居る、毛なし足とは美人の白歴の事ぢやらうナ。この揀擇が恐  
しいぞ。

此遂翁は後に原宿の白隠の松陰寺に住したが、其の法嗣に春叢  
和尚、春叢和尚の會下に阿波の文獎和尚と云ふ荒法師が出来た、  
文獎は餘程腹黒い和尚で、師匠の春叢も御前は迎も師家となる徳  
器ではない、此拄杖子を與へるから諸國を遍歴して到處の師家を  
勘破して廻れと云ふた、乃で文獎はソリヤ面白いと其拄杖子を突  
いて師家荒しを役目としたので、當時師家は阿波の文獎の名を聞  
くと皆恐れられたものぢや、而して大抵の師家はこれに遣られたが、  
其中九州の蘇山と云ふ師家は文獎が來たと聞くや、サア天下の名  
僧ぢや〜と錦茵を出すやら馳走をするやら町重に待遇をしたの  
で、流石の文獎もこれには氣を吞まれて負けた、其他到處では幾

箇も喚鐘を分捕してそれを辨慶のやうに腰に括つて持歩いて居た、  
それは喚鐘を叩いて獨參を聴くのは禪門では餘程大事なことだ立  
派な師家なければ許されぬとしたものぢやからだ、某寺の提唱最  
中に文獎が出懸けて、チャンと師家の技倆を勘破するや否や、ッ  
カツカと師家の面前へ出てクルリと尻を捲り、サア袴の尻は四角  
か八角が見い、と言捨て、サツサと行去つた事もある、禪門近世  
の荒法師ぢやつた。

#### 十四、夢窓國師と戀歌

洛東天龍寺の開山夢想國師は女にせま欲しい美僧で、或時島原  
の太夫が懸想して『清くとも一夜は落ちよ瀧の水濁りてあとの澄ま  
ぬ物かは』と云ふ和歌を贈つた、此太夫も國師を見染むるほどの者

ぢやから、いづれ吉野紫以上の名妓ぢやらうが、國師は『いと』とよ危くすめる露の身を落ちよとさそふ萩の上風』と返歌して毫も心を動かさなんだが、今日の坊主ならドンナ返歌をするぢやらう、アハ、ハ、。

或人が曹洞宗の某和尚に天地一ぱいの文字を書いて呉れよと頼むと、和尚は大きな唐紙一面へ眞黒に墨を塗抹して、サアこれが『暗の夜に啼かぬ鴉の聲さけば生れぬささきの父ぞ戀しき』で天地一ぱいの文字ぢやと云ふたさうだが、眞黒では一枚禪ぢや、半分黒半分白にせねば面白くないよ。

柳は緑花は紅は長安大道に入る眞只中ぢや、座禪の眞只中ぢや、併しこれと共に翻つて柳は緑ならず、花は紅ならずと云ふ境涯をも會得せねば本統の柳緑花紅の妙處が解らぬ、『カラ〜』と虹橋渡

る下駄の音遠い事かな〜』で道は遠きに在らず却つて汝が足元に在りぢや、サア其處に活けてある紅白の芍薬を即今墨繪にする事が出来るか什麼ぢや。

禪僧は只一句だけでも後世學者の爲になる名言を遺さねばならぬ、自分に文字が無ければ古人の句を借つて『八角の糞空裏に走る』とでも何とでも好い、是非死際に一句なければ面白くないとしたものぢや、禿も只の黙雷では不可ぬから、何か一句後世に遺して置きたいよ。

歴代の祖師には大抵語録がある、語録のないのは妙心寺の開山關山國師だけぢや、國師は眼に一丁字もない人ぢやつたが、黄葉の隠元禪師が來朝した砌各山を廻つて祖師の語録を勘査した事がある、其時妙心寺だけには開山の語録が残つて居ないので、ハ、



ア語録もない開山とは拙らぬ開山だナと内心大いに之を貶して居た、スルと寺僧が開山には語録のなかつた代りにコンナ語が残してありますと云たそれは彼の有名な「柏樹子の話に賊の機あり」と云ふ一句ぢや、隠元禪師は之を聴くや、悚然として舌を巻いて怖れ戦いて、三拜九拜したとの事ぢやが、眼に一丁字が無かつてもコンナ一句を遣せば足れりぢや。

賣茶翁は其臨終の際に拂子や如意や茶器や平生自分の愛玩して居た器具一切に引導を渡して焼捨て、仕舞うた、焼捨てるよりも誰かに記念として贈れば好さうなものぢやが、其言草が面白い、袷が死んだら此器具は皆知音を失うたとして泣くのが可愛さうぢやから、先づ引導を渡して火葬をして遣るのぢやと。

博多聖福寺の仙崖和尚も其在世中からチャンと自分の涅槃像に

會下の居士大姉や坐右の器具までが涕泣して居る處を描いて置かれた、それは和尚が團扇片手に床の上に寝轉んで居ると、松の梢に和尚好物の苞納豆がブラ下つて居る、恰で納涼か晝寝のやうな涅槃像ぢやが、袷も今の内からコンナ涅槃像を拵えて置きたいが、袷は夏景色より冬景色の方が好きぢや。

床に掛けてある畫幅か、それも仙崖和尚の墓の圖ぢや、併し其贊「座禪して人は佛になりたるが私も達磨になつて見せましょ」とは人真似をする見識のない墓ぢや何も墓は墓で好いよ、「座禪して元の古巢へ墓」とは發句になつて居るかナ、歸家穩坐と云ふ所ぢや、アハ、ハ、ハ、

此寺の開山堂に菩提樹がある、これは開山千光國師が手植の菩提樹で、即ち我が日本に移植せられた最初の菩提樹ぢやさうナ、

衲は頃目小さい苗木を取つて来て盆栽にして愛玩して居た處が、  
 狗子奴が出て来て皆其葉を喰ひ荒して仕舞うたよ、アハ、これ  
 も奪境不奪人と云ふ處に似て居る狗子かな、狗子は今此椽の下に  
 二匹居る、一匹は白で一匹は黒ぢや、それで白を有佛性、黒を無  
 佛性と名を命けてあるが、寺の狗子は飢えて居ると見えて何でも  
 喰ひよると見えるナ、アハ、

延促劫地とは時間空間を伸縮自在にするので、座禪は宇宙を芥  
 子粒ほどの小さ々に縮める事も、芥子粒を地球ほどの大さに伸ば  
 す事も、千萬年の日月を一刹那に縮める事も出来るし、又雀や鴉  
 の言語迄も解るとはいかな博言學者も三舍を避けるぢやろうアハ

### 十五、本尊は美人

衲が未だ肥前の平戸に居た維僧時分に聞いた話ぢやが、維新以  
 前の頃此肥前に名は忘れたが一人の面白い飄逸洒落な禪僧があつ  
 た、新たに某寺を建てたにつけて本尊佛の入用が出来たので、檀  
 家の重立つた者共が寄り合っている、相談を始した時、此禪僧の  
 曰くに衲は京の本山で修業を積んだ者ぢやし、京の名高い佛師に  
 も知邊があるからナ、本尊佛の事なら萬事衲に任すが好いと引受  
 けたので檀家の者共は一杯喰はされるとは知らず、ソナラ和尚  
 様何分よろしくと一同頭を下げた、數百兩の小判を前へ並  
 べてぢや。

ウム諾々と直に檀家から預かつた數百兩の小判を懷中にして肥

前を出立道中悠りとして京へ上つて來たが、京は花の都の女の都ぢや、土臭い肥前の田舎とは違うて眼に見ゆるものは皆面白いわい、ツイ本尊佛の事も忘れて仕舞うて今日は祇園翌日は鳥原と小判を搬いて浮れ廻つた揚句、一人の綺麗な太夫を落籍して囊中無一物となつたまゝ歸國した、檀家の者共は皆々首を鶴のやうにして待ち兼ねて居た所へサア有難い佛様を買うて來たと一棹の長持を持出されたので、皆々合掌拜跪してドンナ有難い佛様かと思つた。

スルと和尚が恭々しくサア拜まッしやれと長持の蓋を取上げると中には光明赫灼たる本尊佛があるかと思ひの外、恰まさで左甚五郎が彫り上げた京人形のやうな美人がヌツと現はれて優しく會釋を施したので一同は喫驚仰天して居ると、和尚はアハ、ハ、ハ、これは

木や銅で拵えた佛様では御座らぬぞ、浮世の酸いも甘いも知り抜いた佛様ぢや、と云つたので檀家一同も先づ膽玉を抜かれて怒る事も出來ず、果はコンナ美しい佛様なら私の佛檀へも一體づゝ買うて來て貰へば好かつたと大笑ひで事濟みとなつたさうぢや。

人の意表に出るのは随分面白いものぢやが、彼の博多聖福寺の仙崖和尚にもコンナ逸事が多いよ、それは或金満家が其家の新築祝ひに和尚を招待して何か祝ひの歌でもと頼んだ時に和尚は諾々と紙を展べて『ぐるりと家を取巻く貧乏神』と一句書かれたので、主人は之を讀んで大いに不興な顔をして居ると、和尚はアハ、ハ、ハ、と哄笑して其次の句に『七福神は外へ出られず』。

又壇徒の某が何か芽出度い句を書かれよと乞ふた時に『爺死ね婆死ね親死ね子死ね』と云ふ語を書いて與へられたので其檀徒は此句

が何故芽出度いかと怒り出したスルと和尚はこれほど芽出度い事はないぢやないか、爺の次に婆が死んで婆の次に親が死んで親の次に子が死んで子の次に孫が死ぬ、これが順當の死様でこれほど芽出度い事はないと云はれたので、相手の檀徒も成程と感服して今でも其書幅を家寶として子々孫々に傳へて居るさうぢや。

華香居士の出品書雁一羽に付ていろく異論があるやうぢやが、一休禪師に「ヨナ詩があるよ」一雁呼友作兩雁、三雁四雁五六雁、雁去雁來無限雁、雁雁雁雁雁雁雁、又加賀千代女の句ぢやつたか『初雁やまだあとからもく』と云ふのがある、兎に角座禪の上から云ふと雁一羽でも花一輪でも、其一羽一輪の處に妙處があるものぢや、一華開いて天下の春を知り、一葉落ちて天下の秋を知るで、雁一羽の外に群飛せる幅外の雁をも觀取せねば未だ共に繪畫

の美を語るに足らぬやうに禘は思ふナ。

## 十六、左邊底の故事

此室の扁額「左邊」かな、これは妙心寺の故無學和尚の書で、左邊とは五祖法演禪師の故事から取つた室名ぢや、建仁寺も東山と云ふが、法演禪師の住庵も亦支那の東山と呼ぶ處に在つたので、此の禪師の會下に南堂の靜禪師と云があつた雲衲時代から手にも足にも負へぬ卓犖不羈の人ぢやつた、流石に師匠の法演禪師だけは深く其法器なるを看破して居られたが、同參の大衆は皆餘りの亂暴狼籍に毛蟲が蛇蝎のやうに忌嫌ふて居た、後掟に觸れて僧堂を逐ひ出されて近傍の米舂小屋へ入れられた事がある、スルト禪師は之に懲りて精出して米を白げるかと思ひの外、結句掟殿しい僧

堂よりもいくら此米小屋の方が氣樂か知れぬとて、日々酒買うて来ては飲む肴求めて来ては喰ふ、鳶を獲る猫を殺す、實に凄まじい事を遣つて退けた、恰で梅檀林の獅子のやうにこゝに踞座して、自ら此米春小屋を東山左邊底と號して居たのぢや、それで丁度建仁寺も同じ東山ぢやから事故事を取つて室名としたのぢやが、左邊亭の上に東山の二字を冠らせて『東山左邊亭』と讀まねば一段の趣味がないらしく感せられるよ。

此法演禪師は後白雲禪師の法嗣デ、其禪風は峻嶮惡辣、スウ！と人の知らぬ間に腰巾着を切る名人ぢや、公案に由て座禪工夫をする事を始めたのも大抵禪師我が我日本に傳はつて居るのも即ち此東山下の禪風に外ならぬのぢや、殊に面白いのは禪師が法嗣に擧げられた時、先師白雲禪師からの大衆が宛ら西瓜島の如くゴ

ロくと大勢集つて居たのを、禪師は此野鬼閑神、一番大掃除をして遣らうと考へた末、或日祇園島原のやうな狹斜の巷から美妓大勢を招いて、絃歌鼓笛の大散財を遣らかした、スルと驚いたのは一山の衆で、ア、今迄コンナ惡魔に隨身して居たとは知らなんだと、悉く愛想を盡して四方へ退散して仕舞ふた跡でぢや、禪師はア、斯様氣持の清涼した事はないと悠然と禪榻の塵を掃つて、新たに僧鳳凰を養ふこと三千、忽ち東山下の禪風を天下に振起するに至つた、今日僧堂に於ても亦師家の代る度毎に一時大衆の退散を命ずるを定例とするのは即ち此法演禪師が美人軍を以て大衆を追捲られた遺風であるのぢや。

公案は魔箭を防ぐ天帝釋の楯のやうなもので、此楯に據れば兎の毛の隙も敵に窺はるゝ氣遣ひはない、又公案を敲門の瓦子に譬

へて、此瓦子を以てコツ〜と關門の扉を敲く、扉が開いた後は瓦子に用はない、スグ路傍の草に捨つるとしたものでや、此公案がなか〜透りにくいこれを法窟の爪牙と云て爪牙の無い座禪は駄目ぢや、併し學者は却々此爪牙を抜け切らぬ、大體座禪の學者は境内の洗鉢池に湧いて居る蝌蚪のやうに百匹に一匹より物にならぬとしたものでやテ。

觀自在菩薩は耳根から悟入せられた菩薩ぢや、耳根圓通と云ふて人間は耳が最も鋭敏なので、白隱禪師も彼の隻手音聲の公案を舉して耳根悟入の菩薩たらしめんとせられたのぢや、ソレ向ふの泉水に蛙がカラ〜、鯉がチャブ〜、甲を干して居た龜がドブ〜と陥りよつたが聽えたか。

頃日東京の『禪』雜誌を發行する一喝社から禪に夏の感想、避暑法、

最も涼かりし事の三箇條の答案を求めて來たので只一句『あゝ暑〜』と返答を與へたが什麼ぢや、此一句中に三箇條の答案が籠つて居るよ。

これは或僧が洞山和尚に『寒暑到來如何か廻避せん』と問ふた時和尚は『無寒暑の處に向つて去れ』と答へた、僧が更に『如何か是れ無寒暑の處』と云ふと和尚は『寒時は閻梨を寒殺し熱時は閻梨を熱殺す』と答へたのと、又僧が曹山和尚に『恁麼に熱す什麼の處に向つてか廻避せん』と問ふと和尚は『鏝湯爐炭裏に廻避せん』と答へられたと一般ぢやが『あゝ暑〜』これは雪氷を噛むよりも涼しい避暑法ぢやぞ。

### 十七、日蓮の禪機

日蓮上人は流石に傑僧ぢやつた、彼の八釜しい四個格言『念佛無

間、禪天魔、眞言亡國、律國賊』は確かに公案になるよ、上人が曾て法難に逢ふて刑戮せられんとした砌、鎌倉幕府に命乞をして之を救ふたのは建長寺の大覺禪師で、上人は暫らく其因縁で大覺禪師の上に典座飯焚きのことをして居られた事がある、其時に此四個格言が出来たので、最初大覺禪師が四個格言を問はれた時に上人は唯だ『念佛無間、眞言亡國、律國賊』と云ふたまゝ、絶句して、最後に大覺禪師を確と眺み付くるや否や『禪天魔』と喝破したとの事ぢやが、之を聽かれた大覺禪師は其時ドンナに嬉しかつたぢやらう、禪天魔は決して毒罵ぢやないぞ、これほど禪を譽めた語はない、天下の賭漢は皆之を知らずに居る、眞個に五逆雷を聽くが如き好語ぢやテ。

既や梅雨になつたナ、座禪はコンナ日にすると好い、『禪の乾く間

もなし五月雨の今日もふり〜翌日もふり〜』と云ふ誰やらの狂歌がある、左様ぢや禪で想ひ出したが、衲は無禪と云ふ落款を拵えて持つて居るよ、ツマリ默雷が虎の皮の禪を落して天真爛熳の赤裸々となつた處ぢや、アハ、人間はふりまらの無禪でも耻ぢぬほど天真爛熳の境涯に到らねば駄目ぢや、

衲が未だ妙心寺の僧堂に修業して居た時、半風子を一ぱい湧した事がある、ウツ〜と痒いくて堪らんのでソツト其襦袢を庭の垣根へ脱ぎ捨て、素知らん顔をして居た處が、それを何時しか聖侍寮が見付けて一同に申渡した言葉が面白い、『誰か知らんが大衆中に庭の垣根へ襦袢を脱ぎ捨て、置いたものがあらう、私が見付けた時ア〜ラ不思議や其襦袢は手足もないのに獨りで歩き出した、近寄つて熟く〜見ると襦袢が歩き出す筈で半風子が一ぱい湧い

て居る、アナン物を黙つて脱ぎ捨て、置いては不可ん、誰が捨てたのぢや隠さずに言はつしやい』とデロ〜一同の顔を睨み付けて申渡したが、併し袴は未だ其時心の垢が取れて居なかつたので耻かしくて〜堪らん、逆も袴の襦袢ぢやつたと名乗り出る勇氣がないので、皆々黙つて居ると遂々襦袢の主が知れず仕舞ひに濟んだもの、コンナ事位ゐるが耻かしいやうでは到底無禪の境涯を語るに足らぬ。

最一つの失策は夏の暑い盛りぢやつた、袴が汗浸んだ灰色の禪を洗濯する積りで盥へ漬けて置いた處が、師匠も同じく禪を洗濯する積りで出て来て、不圖盥に袴の禪が漬けてあるのを見て、先づ袴の禪を白く雪のやうに洗濯して竿へ乾してから師匠自身の禪の洗濯に取懸られた事がある、それを想ひ出すとア、勿體ない事

をしたと今でも慄然とするよ、アハ、ソリヤ落款は無禪でも禪はしつかりめて居る。

### 十八 何故これが圓い

先年某處に居士大姉の集會があつた處へ行つて、袴は疊へコンナ○(圓相)を畫いて皆々に『ナゼこれが圓いか』と問ふたが、誰一人ビシリと道ひ得た者がなかつた、アナンなら什麼答へる、これも又先年蜂須賀家菩提所の阿波興源寺に大接心があつた時ぢや、袴も隨喜して行つて彼地の居士大姉に『彼の阿波鳴門は左へ渦巻いて居るか右へ渦巻いて居るか』との公案を興へたが、これも亦誰一人道い得た者がなかつた、其後裁判官で根氣好くも態々來京して獨參した者もあつたが、矢張りの的を翦れて居た、サア阿波鳴門は右へ



渦巻いて居るか左へ渦巻いて居るか什麼ぢや。

松田と、云ふ検事が座禪をしたが一向出来なんだ、それに碧巖録や葛藤集を買求めて、これも解つて居るあれも解つて居ると〇印を付けて喜んで居た、此間河野某が誰かに『行到水窮處、座看雲起時』の語を書き與へた事が新聞紙に載つて居たが、今からコンナ語を振舞はすのは小癡ぢや、袷は決して受取らぬよ、いくら悪く云ふても矢張り鳥尾得庵居士は偉かつたと思ふ。

愚溪和尚は蘇山下四哲の一人で博多聖福寺の仙崖和尚から三代目で却々の遣手ぢや園基が一番の道樂で若し鳥鷲の激戦最中に小便でも催すと、オイ一寸待つて呉れと碁盤を引抱えたまゝ、圓圍へ這入つて、八角の糞をひりながら碁を運らす、勝利がないと思ふとソット一二目胡魔化して置いて圓圍を立出で、來られる癖があ

つたさうぢやがこれが無心の遣方ぢやから面白い。

社會活動の中心が即ちこれ座禪の眞只中ぢや、政治家は爲政の上で文士は筆の上に軍人は劔の上に農夫は鋤鋤の上に商人は算盤玉の上にそれ〴〵座禪を働かして居るのじや、それを皆々自覺せず自ら求めて煩悶苦惱の地獄に墮在して居る、座禪は決して隱遁主義のものぢやない、積極進取主義のものぢや、金剛王の寶劔を眞向大上段に振翳して戦闘するのぢや、ソレコッ〴〵と打つ鋤鋤、パチ〴〵と弾く算盤玉、これ皆座禪の眞只中、獅々吼と聽けば獅子吼にも聞えるが解るかな。

## 十九、蚤と虱の禪機

アンタはナゼ蚤の色が赤く、ナゼ半風子の脊中に、と黒い斑点

があるのか知つて居るか、知らねば話して聽かさうかな、それは昔蚤と半風子と喧嘩しよつた事がある、乃で半風子が悪計を案じて態々蚤を我家へ招待した上、サア先づ風呂が沸いて居るからお入浴りと云ふと、蚤は悪計に罹るとは知らずソナラ一汗流さして貰ひませうと涼しさうな浴衣を脱捨て、ザブリと湯槽へ飛び込んだ、其油断を見澄した半風子はイキナリ上から風呂蓋をして籠の下を赫々と焚き付けるわ、中に居る蚤は恰で焦熱地獄の苦患で、熱い〜と狂ひ廻つた末、風呂蓋の隙間を見付けてピシと飛び出すや否や、奴と其處に在合せた割木を手に取るより早く力任せに半風子の脊中を撲り付けた、それで今でも半風子の脊中に、と其時の疵が残つて、手酷く痛棒を喫された名残に體がベチャと扁平になつて居るのぢや、又蚤も既の事に風呂の熱湯で蒸殺さ

る、處ぢやつたので、那様に體が赤くなつて居るのぢやさうな面白いナ、アハ、イヤこれは蚤が風呂から飛び出すとスグ割木を取つて半風子を撲返した捷技を稱揚したので、座禪の學者も斯う云ふ風に擊石火閃電光の機智がなければならぬとの例話ぢやが、此活社會に處して活事業を成す者にも亦此蚤以上の蚤取眼と云のが最も肝要ぢやテ。

師家は學者に點滴も施さぬ、下手に觸つて老婆親切を加へると取返しのかかぬ不具になる、白隱禪師も學者の見性を丁度蟬が殻を抜け出るやうなものぢやと云ふて居る無理に手を加へて殻から出して遣ると其蟬は殻から出る事は出るが飛ぶ事も鳴く事も出来ずに死んで仕舞ふ、それで悟道の見性は機の熟するを待たねば駄目ぢや彼の毬栗を見よ、時到れば自然にパチリと弾け出して其實

の旨味いこと此上なしぢや、座禪は勿論凡て成功の的を射落すには急かず騒がず氣根を續けるのが第一義である。

私はいくら其色が美しうても西洋の花卉は嫌ひぢや、日本の花卉の方に言ふべからざる趣味がある、ソリヤ禪坊主には大揀擇がある、此大揀擇がなくて什麼するか、床に活けてあるのは紫白の燕子花ぢやが、日々居士大姉が交るゝ挿し代へて置いて呉れるので、芍薬、薊、こぶし、百合など坐乍の花畠ぢや、ナニ起てば芍薬坐れば牡丹歩く姿は百合の花の句が面白いと云ふのか、これは十身調御と云ふて座禪の最も入釜しい處に適ふた句ぢや、無心に唄ふて居る俚歌童謡には時々コンナ悠遠深長な禪味の籠つて居る者を見出すよ。

芭蕉の發句『古池や蛙飛び込む水の音』も座禪の公案になつて居る、

芭蕉が創作の意は知らぬが、禘は此古池の古の字が眼目ぢやと思ふ、只だドブン——の水音が正風の基を開いた獅子吼ぢやと思はれるが、江湖に此ドブン——の俳味を解する俳人はあるぢやらうか、什麼ぢやらう。

彼の棒喝の禪風を振起した徳山禪師の法嗣巖頭和尚は會昌の沙汰に逢ふて渡子となつて菩薩行をせられた程の遣手ぢやつたが後遂に強盜の爲に斬殺せられた時にぢや、痛い——苦い——と凄まじく叫喚せられる聲が數里四方に聞えたと云ふ事である、それを白隱禪師が未だ雛僧の時分に其傳を讀んで知つて、コンナ名僧がナゼ卑怯にも痛い——苦い——と叫喚したかと、流石に白隱禪師ぢや早くも此扇要に着眼して骨折られた末、廿四歳の時越後高田の住庵で初めて見性悟道をせられた際にぢや、成程雛僧の時分か

ら疑問として居た痛い〜苦い苦いと叫喚した巖頭和尚は偉い、和尚は決して死んで居られぬ、ソレ此通り今でも生きて居られると雀躍して喜れたさうぢやが、座禪の出来れば出来る程痛い〜苦い〜ぢや。

一休和尚が臨終の際にも亦弟子が何か一句遺偈を聴きたいと乞ふと、和尚は『只死にともない』と云はれた、スルト弟子はこれも平生の洒落戯談かと思つて是非一句遺偈をと重ねて乞ふと、今迄端座瞑目して居た和尚は此時振威一番再び『死にともない』と大喝せられたとの事ぢやが、これ第一の箭は尙軽く、第二の箭は重しぢやテ。

芭蕉の古池の吟は此間も云ふた通り古池やの古の字が眼目ぢやが、凡て祖録などを讀む時に古の字があれば能々注意をして玩味

するが好い、僧が趙州和尚に『古澗寒泉の時如何』と問ふと趙州は『苦』と答へ『之を飲みて後如何』と問ふと『死』と答へて居るが、此古澗寒泉の古の字も亦古池やの古と同じく、玄目玉で讀破すると決して並々の古の字ではない、古今を超絶した古の字であるのぢや。

## 二十六、元亨以上の僧

衲の愛誦して居る仙崖和尚の偈に『佛會人天稱八萬、孔門弟子亦三千、山僧獨坐藤蘿下、時看浮雲過眼前』と云ふのがあつた、これは實に凡聖以上の高い見識で、浮雲とは何を指してあるのか、唯だ平仄を弄して居る詩人などには窺知する事の出来ぬ偈ぢやぞ、故獨園和尚のにも『一箇說仁事已煩、五千餘卷亦多言、山僧不蹈二翁跡、高臥科風落葉村』と云ふのがあつた、これ仙崖和尚のと同曲、妙

處語らんと欲して口啞の如しの境涯である、高臥とは浮世捨て、の山中住居ではない、十字街頭に立働いて居る時にも、女娃童孺と談笑して居る時にもあるもので、衲の未だ雲水時代はコンナ偈ばかりを集めて喜んで居た、建仁寺の歴代中に、生平不作腐儒語、自許元亨以上僧」と自ら元亨釋書以上の高僧を以て任じて居た天章と云ふ和尚もあつたよ。

京は釣鐘の都ぢや、此頃短夜のはのくと白み出すと寺々の曉鐘があちらにもゴーンこちらにもゴーンと響き渡つて鴉がガア雀がチユ汽笛がピユ孩子在ホギア蚊がブンと朝から晩までそれはく聲の絶間なしぢや、此聲の次に多いのは千種萬様の色で『染め出す人はなけれど春來れば柳は緑花は紅』と云ふ歌の如く眼に見ゆるもの色ならざるは莫しである、美人を見たら雪隠で糞する時を思へ

など云ふのは逆を以て順を制する下根の事、いかに美しい女色でもソレ此通り美しいくになれば跡方も無くなつて仕舞ふのぢや、煩惱もこゝに至ると盗人を捕へて見れば我兒なりで、決して他人ぢやない。

昔蜂の巢と瓢箪の嫌ひな二人の武士があつた、或日瓢箪嫌ひの武士が蜂の巢嫌ひの武士を茶に招いて、床の置物に珍らしい蜂の巢を飾つて誇つて居た、ヌルト茶に招かれた武士は何よりも嫌ひな蜂の巢があるので碌々茶も飲まずに逃げ歸つてこれを遺恨に思ひ、此儘泣寝入つては武士の一分が立たぬと愈よ眞劔勝負をする事になつた、處が却々勝負が付かぬので一人の方がこゝぞと蜂の巢を突き出すと一人の方もサアこれでも兜を脱がぬかと瓢箪を突き出したが最後、ハツと双方左右へ逃げ出してどちらにも怪我なし

に事済となつたと云ふ話があるがこれほど蜂の巢や瓢箪好き嫌ひがあるとは却々禪味があるナ。

### 二十一、坊主が社祓

毀釋論の盛んな維新の際、小口から佛刹寺閣が破壊せられるので天下の緇徒が八釜しく不平を唱へ出した時にぢや、政府の役人が『ソナニ不平を唱へるのなら、皆元の天竺へ去んで貰ひませう』と遣つて除けたのでこれには流石の僧侶も弱つたそうぢや、確か紫野大徳寺へぢやつたか、禮服着用で役僧に出頭せよとの命令が下つた、處が、ドソナ禮服を着用して出頭すれば好のか解らん、遂々坊主頭に社祓を着用に及んで出頭したと云ふ狼狽へ方ぢやつたのでこれは一休様の洒落にもない圖ぢやと叢林の一笑話となつ

た事もある、其頃四條橋の欄干には蓮華牡丹の彫物がしてあつたが、襦はそれを初めて見てハ、ア京は流石に佛法の土地ぢや、ソナ時勢も矢張り蓮華と彫物がしてあるナと思つた事がある、今でも四條橋の彫物は蓮華牡丹かナ、ナニ祇園團子に櫻の花か。

僧堂生活は苦しい中にも忘られぬ楽しさがある、襦が梅林に居る頃、僧堂の清規としては夏冬なしに一枚の蒲團を柏餅にして寝るのぢやが、襦は大の寒がりぢやつたので、助香の惟山和尚と云ふのと相談の上、或夜ソツト病僧に用ふる蒲團を盗んで来たものゝ見付けられると痛棒を喰ふから、大衆の寐静まるのを待つて着る、大衆の起きぬ先に起きて片付ける、其忙しいと一枚の蒲團の爲に安樂に寝る事も出来ぬのでア、悪いことは出来ぬものぢや、矢張り寒い方がイ、と其蒲團を元へ返して置いた事があるが、人

生も亦此蒲團を大きくしたようなもので、皆自繩自縛で苦んで居る者ばかりぢや。

此間の日出新聞に曹洞宗の奕堂和尚の半風子の話があつたが、彼の半風子は只の半風子ぢやなからう、丁度百丈禪師が侍者に火を持つて来いと云ふと侍者は正直に火は消えてありませんと答へた、スルト禪師は爐灰を掻き探して豆の如き火を摘み出し、ソレ看よとの言下に其侍者が大悟徹底したと云ふのと同じで、奕堂和尚が雲衲に半風子を湧して居るかと問はれたのも必ず襟の竅を指したのぢやらうと思ふよ。

江州伊香の片山璞と云ふ人から塗毒鼓中の衲が圓山花見の時の放屁、八角の糞などの話を面白い畫に描いて送つて来たが、禪はコナ屁や糞や汚い物ばかりと思つては眉鬚が墮落するよ、牡丹

芍薬は愚か燦爛と錦の御旗の翻えるやうな美しい處もあるのぢや。ナニ『三級浪高魚化龍、痴人猶辱野塘水』かな、左様ぢや三級とは禹門の瀧が三段になつて落ちて居るのを云ふので、即ち參禪問道の學者を鯉の瀧登りに喩へた語ぢや、此瀧は却々容易に登れん瀧ぢやぞ、大抵の鯉は岩石でコツリと鼻打つたり頭打つたり三十六鱗忽ち龍と化する者に至ては千尾に十尾も無い、口頭ばかりで腸の無い座禪は丁度五月鯉のようなもので、逆も此瀧を登る勇ましい鯉群には入れぬよ、所謂痴人猶辱野塘水ぢや。

### 二十二、耳根圓通の三昧

彼の廿五菩薩の中でも此龍門に登り得たのは觀音大士只一人で、他の菩薩は皆々點頭して能く此瀧を登り切らなんださうぢや勿論

菩薩の事ぢやから夫々悟道の見地は持つて居るが、其中一番悟道の方法の宜かつたのは観音大士で、これは耳根圓通の三昧を得て居た、ス——と水を觀じて悟入した菩薩もあり、鼻を觀じて悟入した菩薩もあるが鼻で悟入した大菩薩は最初鼻頭が白くなり、次に顔中が白くなり、遂に大千世界までが白くなつたさうぢやが、人間には耳根圓通の三昧が一番入り易いので観音大士一人及第せられたのぢや、ソレ奔雷を聽くのも蚊虻を聞くのも皆此耳根の働きぢやらう。

經文には動物の出生を濕胎卵化の四種に分けてある、濕の部は蚯蚓や蛤蜊、胎の部は衲等人間や狗子、卵の部は雀や鶏の類、化の部は腐草、螢に化するとか子子の蚊になるのを云ふのぢやが、衲等人間は此胎生計りでなく座禪の上からはスグ龍となつて雲を呼び

虎となつて風を起し猫とも鼠とも自由自在に變化の出来る神通力を持つて居るが、これ王母の桃を羨まず自ら仙家の棗ありぢやテ、九州地方では墓の事をワクと云ふと見えるナ、それは或人が彼の博多聖福寺の仙崖和尚に七福神が何か金もふけのできる繪を描いて呉れよと頼んだ時に、和尚はヨシ——と墓二匹を描いて與へられた、スルト或人はナゼこれが金のもふかる繪かと尋ねると和尚はアハ、と笑つて『これは金銀がワクワクぢやないか』と洒落られたさうぢやが、今でも錢入の事を墓口と云ふのは此ワクワクから起つた名ぢやなからうが、京都では餘り仙崖和尚の逸事を知つて居る者はないが、和尚は却々の遣手の上に俳句も俳畫も上手ぢやつた、衲の知つて居るだけでも大黒と布袋と壽老人の畫賛に『三服を一服にして萬服茶と』、又尻をひん捲つた男の畫に『畢丸を打出



すがよし夕納涼』と云ふ天地を尻の下に敷いた見識の高い句がある、白隠禪師の達磨賛』よしあしの葉をひつ敷いて夕納涼』と云ふのに似た句ぢや、禪師にも『初夢や一富士二鷹三茄子』と云ふ名句がある、今日の俳句にもコンナ風に禪味を加へたら面白からうと思ふよ、文士が筆三昧に入り商人が算盤三昧に入るのは事理一致と云ふて即ち菩薩の修行である、二寸見ると世の中の間人は皆齷齪として無用の仕事ばかりして居る、恰で蛙がビョコ〜と柳の枝へ飛付いて居るやうな風に思はれるが、併し蛙は蛙の腹一杯の仕事をして居るのぢや、此時は蛙の天下ぢや獅子でも虎でも之を傍観して蛙に花を持して遣らねばならぬ、アハハ、今日は何でも議論や理窟の入釜しい蛙の天下ぢやが、併し蛙は蛙ぢや、いくら騒いでも真理を動かす事は出来ん、世界はドーもならん、過去も現在も

千萬年の未來も此儘の真理此儘の世界ぢや。

松平越中守の歌に『一匹の鼠あらそふ鶯鴉一文錢にたかる乞食』と云ふのがある、乞食と云へば、芝増上寺の行誠上人は乞食に出逢ふと乞食は無慾な者ぢやとて恭しく禮拜せられたさうぢやが、我々が乞食を尊敬をして堪るもんか、若し乞食に落ちても空手で瓜を取つた大燈國師のやうな乞食にならねば駄目ぢや。

### 二十三、眞言宗の妻帯

新義眞言宗に妻帯問題が持上つて居るさうぢやが、實に天下の笑物ぢや、ソंनाに嬾が欲しければ還俗すれば好いよ、假初にも寺を持つて居る以上は、妻帯瞰肉などは最も慎まねばならぬとしたものぢや、それに萬事洒落な禪宗ならばイザ知らず、戒律の最

も嚴肅な眞言宗にコシナ問題の持上るのは不思議な心地がするが、これ爲るナと云ふ事を仕たがる人間の弱點であらう、又妻帯の理由に六ヶしい理屈を並べるのは不可ん、唯だア、嬾が持ちたい、鯛が喰ひたい——と正直に云ふた方が未だしも無邪氣で面白い、兎に角眞言でも禪宗でも嬾が欲しい坊主は先づ頭が圓いか四角いか鏡と相談するが好い、若し頭が圓ければ、嬾などを持つては大法に對して濟まぬ、若し頭が四角いと思へばサツサと嫌持つて還俗するが好い或者が故獨園和尚に『今日の坊主は前から見ると坊主ぢやが後から見ると俗人ぢや』と云ふた、スルと和尚はイヤ半分々々位ならドウが堪忍して遣れと云はれた事がある處が此頃の坊主は段々墮落して僧三俗七の化物になつて仕舞うた、其證據に昨今東京あたりでは袈裟法衣は靴に入れて皆々羽織袴で歩いて居る相

ぢや、而して袈裟法衣は一寸讀經の時に着る丈けの事ぢやさうなイヤ釋迦在世の時代は實に戒律堅固なものぢやつた、殊に彼の六群比丘の如きは戒律嚴肅恰で禮義三百威儀三千、起ては芍藥坐れば牡丹と云ふ風で一例を擧ぐると油入れを捧ぐるのに毫しも傾かさず坐る時も紙一枚置いて其紙のバツと風立たぬやうな坐ると云ふ位なぢやつたが、それでも釋迦は此六群比丘を破戒の甚しいものと仰せられた、若し釋迦が今日の妻帯問題を聞かれたらそれこそ何と云はれるぢやらう、ナニ久米仙人の居た大和の久米寺か、あれも眞言宗ぢやが成程眞言宗に妻帯問題の持上るのも萬更偶然ぢやないナ、アハ、ハ、ハ、

京は流石に本山の土地でソシナ事は無いが、田舎へ行くと坊主が嫌持つたり殺生するのは當然になつて居る、袴の未だ雲水時代

にぢやが、肥前鹽田の光桂寺と云ふ寺へ一人住職が欲しいと態々檀徒から頼んで来た、スルと幸ひ一人あつたので世話する事になり、此人は年は若い女嫌ひで肴も喰はぬ道心堅固な人ぢやと一廉檀徒を喜ばす積りで仲人口を利いた處が、檀徒は怪訝な顔付をして『お世話は一寸待て下さい、年の若いのに女が嫌ひで肴を喰はぬ坊様とはソリヤ不具でムリませんか』と云ふた笑草があるが。

『春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、若無閑事掛心頭、便是人間好時節』と云ふ偈があるが、斯うなると天下太平ぢや、ウム床の掛軸か、あれも仙崖和尚の牧童圖ぢや『うなる子のかへるやいづこ吹笛に鹿の音そうる野邊の夕ぐれ』とは面白い賛ぢやナ、彼の牧童は笛吹いてドコへ歸るのぢやらう、アハ、、笛の穴へ歸ると云ふのか、左様か。

## 二十四、糞ひつて悟る

又糞の話ぢやが、宋の翰林學士張九成と云ふのは大慧禪士と同時代の人で、此人は糞ひつて居る時に悟りよつた、それは尻の下に居る蛙の頭へドサリと糞をひり當てたのでアツ痛い——ギヤアと鳴き出した刹那にガラリと見性したが、コソナ糞こそ本統に黄金よりも貴い糞ぢやテ。

眞宗の信徒は佛檀の阿彌陀様だけに御飯を上げて一向先祖には供物をせぬ、何故かと問ふと阿彌陀様に御飯を上げると先祖は上げずともお腹が膨れると云ふ事ぢやさうなが面白いナ、これ我が禪家の『張公喫酒李公醉』に似て居る、

天子の頭の上で、もお構ひなしに色事をするのは蠅ぢや、常陸

山梅ヶ谷でも恐れずに螿すのは蚤や蚊ぢや、鼻は又鼻で人間はナゼ晝寝て夜働かぬぢやろと人間を笑ふて居る、萬物はそれごとく自家の小天地を作つて居るのぢやがこれは笑ふ事は出来ん、這裡には佛祖も窺へぬ妙處があるのぢや、と斯う活して遣れば天下何物も捨つべきものはない袷の腹は恰で布袋和尚の袋のやうに、善い物を入れれば悪い物も入る、而もスーと入つて一物も滞らぬのぢや、天地を容れても尙餘りある大きな腹となるのぢや。

狂歌師の太田蜀山人は鎌倉の誠拙和尚と至極心易かつたさうで、或日和尙が羅漢堂でころげて頭を打たのを見て即座に『羅漢から落ちて頭を佛菩薩』と遣つた處が和尚はスグ『坊主頭に怪我なかりけり』と下の句を附けられた、鑿と云はゞ槌で此位ゝ敏捷くないと頓智とは云へぬナ又山人は石の三味線と云ふ題で『石の三味爲の葛を絃

にかけ秋風吹けばちりつんでんしやん』と無絃琴と云處を詠んだのもある『澤庵禪師にも』おめしなら歸りたくあん思へども江戸とし聞けばひさしきたなし』と云ふ禪師が佐渡へ流謫せられて召戻された砌詠まれた狂歌がある、博多聖福寺の仙崖和尚も元美濃の人ぢやが、未だ雲水時代に故郷の寺を逐出された折『雨傘をひろげて見れば天が下身は濡るゝとも蓑はたのまじ』と美濃に知音無きを諷した狂歌一首詠捨て、飄然と行脚に出られたが、袷はこんな洒落な狂歌狂句の方に人情の機微を穿つた禪味の饒いのがあるやうに思ふが什麼ぢやらう。

『寒熱の地獄にかよふ茶椀杓は心無ければ苦しきもなし』とは千利休の茶道の和歌ぢやが、座禪の上から云ふと此心無ければ苦みもなしは活機のない死句である、之を彼の二宮尊徳翁が『寒熱の地獄

にかよふ茶椀杓は勤めとなれば苦みもなし」と下の句を詠み變へられたのは流石に尊徳翁の面目を現はして居るが、併し未だ八成を道ひ得たに過ぎぬのぢや。

白隠禪師の都々逸にも『荒い風にも當てまいものを遣るか信濃の雪國へ』と云ふのがある、これは信州の某和尚に印可を與へられた時の達磨の賛にかゝれた都々逸じやそうナ。

## 二十五、阿呆になる修業

『數聲清磬是非外、一箇閑人天地間』と云ふ禪の好きな偈語がある、所詮座禪は阿呆になる仕事をして居るのぢや、イヤ最初からの阿呆ではない、十分仕上げた後の阿呆ぢや、富んで後の貧、鯛の味を知つて後の精進ぢやが、却々此阿呆にはなれんど、壬生狂言で

も阿呆の役は上手がする六ヶ敷いもので、箒でも破箒、筆でも禿筆とならねば未だ共に無功の功を成就する事は出来ぬよ。

立話よりも座談の方が落着いてイ、やうぢやナ、座談は腹に力が入るが立話は口ばかりで腹はヘソくぢや、其證據には此腹の出来てない人間が卓子の前に起つて演説とか講話とかしても一向聴衆に感化を與へない、禪は座談には踞地金毛の獅子と云ふ趣きがあつて好いと思ふよ、座禪を遣らん人間は切めて毎朝一時間か二時間静座をする事を務めて、此腹を拵える工夫をすべしぢや。

禪が雛僧の時にいつも師匠から叱られた事がある、それはお經を早口に讀むなと叱られたのぢやが其言草が面白い、お前の讀む般若心經は何ぢやベラく〜と早口で人偏や言偏や口偏ばかりより讀めて居ないぞ、摩訶般若なら摩訶般若と最と落着いて確乎讀め

よと云はれたが面白からう。此腹が出来てなければいくら富婁那の辯を揮つて説教しても、ツマリ人偏言偏口偏の亞流ぢやコンナ口頭の事で什麼して聴衆に感化が與へられるものぢやない。

盤珪禪師は明末の道者玄の衣鉢を傳へた人で、此人が我國の長崎へ渡來して初めて不生不滅の禪風を唱へられたのぢやが、不生不滅は一枚禪ぢやと云ふので、乃ち白隱禪師が此己墜の禪風を振起せられたのぢやサア此鉢の紫の朝顔の花は生きて居るか死んで居るか。

袷は是迄達磨と觀音の贊だけはした事がない、贊をすればこれ達磨と觀音を汚す事になる、これは袷の見識ぢや、一句でも達磨や觀音の贊が出来て堪るものか、寧ろ白紙のまま、で放て置く方が好いのぢや、併しこれは袷の所藏の達磨や觀音に限るので他人か

ら頼まれた時は又草に落ちて其人相應の達磨や觀音の贊をして與へるが、斯なると誰も達磨彼も觀音ぢやアハ、ハ、ハ、

『引き寄せて結べば草の庵にて解くれば元の野原なりけり』とは誰かの和歌ぢやつたナ、袷は此下の句を解かねど元の野原なりけりと詠み替へると一層面白うなると思ふよ、これ玉殿も猶草座の如く草座も亦玉殿に似たりと云ふ境涯で、所謂絶學無爲の閑道人の住居ぢやが、世の富豪達もチト斯心を以て心として貰ひたいものぢや、榮華は只一輪の白牡丹で事足るのぢや。

## 二十六 王冠と荷衣

『一池荷葉衣無盡、數樹松垂食有餘、強被世人知住處、又移茅舍入深居』との偈を作つた、明州大梅山法常禪師は達磨の九年面壁と

ころぢやない、樹下石上四十年も山を下らずに修業三昧に入つて居た人ぢやが其見識の高邁なは勿論精根の強根な事は後世學者の好い手本ではないか、馬祖と即心即佛の問答をしたのも此禪師で、偈にもある通り平生蓮の衣即ち荷衣を纏うて身を清淨に持つて居られたさうぢやが、荷衣とは夏は清涼で着心が好からうナ、袈も他日朝鮮國王となつた曉は此荷衣ぢやないが、王冠の代りに破蓮の葉を冠つて君臨したいと思つて居るよ、アハ、。

『楊岐山方會禪師の偈にも、『楊岐乍住屋壁疎、滿牀悉撮雪眞珠、縮却項兮暗嗟噓、翻想古人樹下居』と云ふのがある、夏の暑い時にコナに寒いほど白雪が降つて呉れたら好いが、これが臘八時分の嚴寒に斯う吹雪が禪榻を侵すほど吹き込んで堪るまい此偈は即ち深く座禪三昧に入つて忘れて居たが、フト氣が付くところ、は

楊岐山の破寺の事ぢやからビユービユーと頻りに吹雪が吹き込んで、膝の上まで眞白になつて居る、ア、寒い——と知らず識らず頂を龜の首のやうに縮めたが、イヤ此位の事は何でもない、樹下石上の修業に比べては何でもないと再び思ひ返したとの意味ぢやが、古昔の高僧は皆なコナ刻苦をして居られる、今日のやうに僧堂に安座して居る雲衲達は二六時中此方會禪師の苦行を心として聖胎長養に努めねばならぬのぢや、それで白隱禪師も此故事を詠んで雲衲居士を戒められたが其和歌は『忘れては寒しとおもふ牀の雪を拂ふひまなき人もありしに』。

備前池田侯の菩提所曹源寺に儀山和尚と云ふ歴々があつた、一度京都の紫野大徳寺に見えて居た時に袈も未だ其時分は雲水ぢやつたので折々參禪した事がある、眉毛の皓くなつた血色の棗のや

うに赭いそれは誠に有難い老僧ぢやつたが、此和尚の居士に頗る飄輕な漢子があつて、或日和尚を試さうと思つて美しい應舉の枕繪を持參して見せた處が、和尚は莞爾として其枕繪を眺めた末「サア返さう、君子は一見して再見せずぢや」と云はれたので、これは實に名言ぢやとて其頃禪林の佳談になつて居た、サア一見して再見せずとは何處を指して云ふたのぢや解るかナ、武藏坊辨慶も亦美人の肌を一見して再見せずぢやつたさうなが、これには却々向上の禪味が籠つて居るよ。

故獨園和尚は提唱の折は至極温和しい和尚ぢやつたが、其代り室内は暖簾座禪てふわりくと箭を受け流して却々ねつかつたそれと和尚も常々提唱の上手な師家は案外室内の手緩い者、提唱の下手な師家は其割合に室内がねつい者ぢやと話して居られたが、

成程此月旦は正鵠に中つて居るやうで、衲も左様感じて居る。

## 二十七、大石良雄の禪機

之を思ひ之を思へば鬼神之を助くて、迷信でも何でも精神を純一にして信仰すれば實に恐しいもので、其刹那は決して迷信と誹る事は出来ぬ、乃ち座禪も亦暑いなら暑い寒いなら寒いと現成公案に由つて此精神を純一にする修業で、滴水滴凍、到る處主となるに在るのぢやが、這裡に至ると釋迦達磨と雖も斯心を窺ひ能はずとしたものぢや、彼の大石良雄が故主の仇敵吉良上野介を附狙うて居た時、自ら晦まして墨染の一方に遊女風情と面無い千鳥などをして戯れて居た、折しも故主の命日も構はずに蝟喰うて、酒席に紛れて居た間諜をしてハ、ア故主の命日にさへ精進せぬやう



な不忠の臣逆も仇討などはすまいと油断せしめたと云ふ話があるが、これ大石良雄に座禪の出来た上、純忠無二の至誠が、自然と此滴水滴凍の境涯に入らしめ斯く問諜に此腹を窺知せられなんだのぢやなからうかと思はれるナ。

袷が一年中で一番苦しいものは布薩式に梵網經を讀む時ぢやが、經中の十戒を講誦する時は袷即釋迦で、一舉する拂子には塵尾の威令があるのぢや、布薩は建仁寺に於ける最も莊嚴な禮式で、小笠原流の禮式の根本、白槌の帛紗は茶道の帛紗の濫觴となつたものであるのぢや、ソリヤ一年一遍の莊嚴な禮式ぢやからナ、扇も使はず汗も拭かずに式中だけは苦熱を辛抱して居るよ、アハアハ。漁師が法螺貝を獲る方法を聞くと、濱邊の松の枝に灘か伊丹のイ、香のする酒樽をブラ下げて置く相な、スルと海中の法螺貝奴

がア旨味さうな酒の匂ひがするナ、何處に酒があるのか知らんとゾロゾロ濱邊へ這上つて來て見上げると、高い松の枝に酒樽がブラ下つて居る、酒は飲みたいが貝が重たうて登る事が出来ん、ソコで貝の中から抜け出して酒を飲み松の枝に登る、ア蓬萊の仙酒とはこれぢやらうと微醺を催ふした時には、早や漁師が貝を獲つて仕舞うた跡ぢや、これが法螺貝を獲る方法ぢやさうなが、酒と女に家庭や細君を忘るゝ者も亦た丁度法螺貝と同じ愚の骨頂ぢやテ。日露戦役の際旅順の攻取に参加して名譽の戦死を遂げた木下中佐は誠に武骨一遍な好軍人ぢやつた、建仁寺へ三浦梶樓將軍と一緒に初めて見えた折、書院へ通して茶菓を饗應した處が、大抵のお客は菓子を一個二個撮んで茶を喫む位のものぢやが、中佐は座談盡きてサア立歸らうとする間際に奉書の紙へ山盛りにした菓

子をクル〜と包んでソツと袂へ入れた、傍から梧樓將軍がそれを見付けてソナ結構な菓子と澤山持歸つては失禮ぢやらうと云はれると、中佐はイヤ京都では出された菓子をスツカリ持歸らぬのが却つて失禮に當るのですと皆な紙に包んで持歸られたが其時衲は流石軍人は無邪氣で面白いナと思ふたよ、それから心易くなつて一度遊びに来て呉れとの事で行つた折にも中佐は雪隠に這入りながら窓を覗きつゝ大聲で談話をする、御馳走をするとて夫子自ら茄子や午莠や豆腐などを買ひ集めて來たのは好いが『サア失敗た』との事ぢや、何が失敗つたのかと問ふと餘り御馳走を買ひ過ぎたと云ふ、借てそれを煮てからは箸取らぬ先から旨味からう〜と自慢で、衲はウム却々不味くないナと云ふより仕様がなかつた。

## 二十八、慈視閣の風光

衲の書齋に充てゝある三階を慈視閣と命名してあるが、これは建仁寺八勝の一を取つた名ぢや、ズツと閣前の竹籐が拓けたので餘程眺望が廣濶になつた、遙か西南の方に東寺の塔近く清水や八坂の塔も手に取るやうで、これから閣名を三塔樓とでも付け替へたら面白からうと思ふて居るが、朝夕此閣内に靜坐して東山の翠微に相對して居ると春の花時分は薄紅の化粧、冬の雪景色は厚白粉を塗つたやうで何とも云へぬ境涯ぢや、衲が此寺へ來てから最う幾度か東山の花紅葉を見たので舊知の情がある、イヤ東山ばかりぢやない其處の禪堂の庭の銀杏の樹を見てもスグ舊知の感が起る、夏の緑の天地になると銀杏の葉が疊々と生茂るかと思ふと、

それが冬枯の寒い風に悉く黄葉して散つて仕舞ふ、閣内までも其扇形の黄葉が散つて来る、茂つたり散つたり袷が此寺へ来てから早や殆むと二十年、銀杏の樹は依然として生きて居る、ウム閣前に在る靈源院の松の樹か、あれも却々氣持の好い大木ぢやが、ナニ時々齋が梢に止つて抜羽を落すが、アンタは其抜羽を拾ふてドナ感じが起るかナ、忽ち鷲鳥に化して羽搏つやうな心地にはならぬか、袷もいつも彼の松を獨坐の友として居るが、此『獨有高風消暑友、庭前百尺一蒼龍』と云ふ偈は袷が彼の松を詠じたのぢや、實に天に朝する一蒼龍ぢや。

松と云へは臨濟和尚の松に限る、それは和尚が松を栽える次に師匠の黄檗が此深山裏に松を栽えて什歷するかと問ふた、スルト和尚は一には山門のために境致となし、二には後人のために標榜

となさん、と道ひ了るや鑿頭を以て打地三下した事を云ふのぢやが、凡そ人間は皆此臨濟栽松の大見識と大抱負がなければ駄目ぢや、此臨濟の栽えたのは松樹千年の縁、普通の松ぢやない、况むや花の散り易い櫻の花のやうな物ぢやないぞ、サア世人は誰も彼も一生中に必ず此臨濟栽松を手本として國家の爲に千古不朽の事業、後人の標榜となるべき松を栽えねばならぬのぢや。

## 二十九、大根蕪の生命

頃日の北海道の某から妙な事柄を質問して來た、それは蕪や大根の野菜類にでも生命が惜しいと云ふ心がある、生々繁殖して居たいと思へばこそ大くもなる、それを我々人間が菜刀で切つたり潰けたり煮たりして喰ふのは慘酷ぢや、これ獸類や魚鳥類を喰ふ

のと同じく矢張り殺生ではないか貴意如何との質問ぢやが禪は未だ何とも答へて遣らずに居る、アンタなら什麼答へるか、ナニ蕪や大根はサア人間様、何卒か喰べてお呉れやすと云ふて大きくなつて居るのぢやと解釋するのか、アハ、ハ、ハ、

ソリヤ山川草木一切佛性がある、鳩にも三枝の禮、鴉にも反哺の孝、鼠も忠と云ふ事を知て居るからナ、蕪や大根にも亦喰はれるとア、痛い、位ぬは知つて居るかも知らんテ、アハ、ハ、ハ、

建仁寺のだらりの鐘か、あれは昔時山内に火事のあつた時無茶苦茶に亂打したもののぢやから龜裂が這入つて居るさうで、一種奇異な音響を發する鐘ぢや、だらりと云ふと京名物の一になつて近松門左衛門の淨璃理長町女腹切中の文句にも出て居るさうなが、だらりとは俗の訛で陀羅尼の方が正しいのぢや、陀羅尼とは梵語、

之を譯すると總持と云ふ事になる、總持とは此ゴ——ンの音響の中に森羅萬象悉く含んで居ると云ふ意味ぢや。

琉球人は坊主の事を指して佛の御大將と云ふて居る、禪が未だ壹岐に居た折ぢやつた、琉球の呉服商人が寺へ遣て來て玄關で「アンタ——アンタ——」大聲で呼ぶアンタ——とは頼まうと云ふ案内の言葉ぢやので禪が取次に出て呉服は要らんと斷ると、維僧さんでは解らん佛の御大將に、御眼に懸りたいと云ひよつたが、坊主を佛の御大將とは却々面白い方言ぢやナ、イヤ維僧を別に佛の兵隊さんとも云ひよらなかつた、アハ、ハ、ハ、

僧堂では毎年八月の十二日、半夏の大接心が了ると起單留錫と云ふ事を遣る、起單單は雲衲の坐具とは雲衲が單を起つと云ふ意味で、ツマリ雲衲中のばら助や不品行の奴等を僧堂から逐ひ出す

の謂ぢや、又留錫とは文字通りの留錫で、これは其儘僧堂に留錫しても苦しくない者を指すのぢやが此日は表席と云ふ雲衲中の役僧が起單帳と留錫帳の二冊の帳面を前に控えて閻魔の如き怖い顔付をして居る、而して一々大衆を呼び付けて『アンタは起單ぢやらう』『イ、エ如何仕りまして留錫です』と云ふ鹽梅に十分平生の素行の悪い點を指摘して反省せしめる、反省せしめてから漸く留錫帳に記入するのぢやが、迎も駄目なばら助は何と申譯しても構はずサツサと起單帳に記入して愚圖々々すれば警策を以て撲き出すのが清規ぢや、それで一度此起單帳に付けられたが最期「彼奴は起單帳に付けられた奴ぢや」とて何處の僧堂へ掛錫しても擯斥せられるので雲衲は昔から此日を頭痛鉢巻で迎へたものぢや、ウム一般の雲衲には表席、表席には衲から直接小言を云ふのぢやが、衲には

誰も小言を云ふ者が無い、只祖師の達磨がアノ恐しい大きな眼玉を呉れるばかりぢや、アハ、ハ、ハ、

雲衲には手にも足にも負へん横着な奴が多い、昔は天下を横行濶歩した者は僧堂の雲衲で、丁度今日の書生と同じく覇氣満々たる者ばかりぢやつた、未だ東海道の箱根に關所のあつた時分にコナ横着な事をしよつた雲衲がある、それ當時關所を通るには雲衲は皆冠つて居る綱代笠を脱いで會釋して通らねばならぬ掟ぢやつたのに、衲の知つて居る雲衲はナニ衲は笠を着たまゝ通つて見せる、其代りお前達の笠を皆貸せと云つて同伴の七八人雲衲の綱代笠をことごとく取上て仕舞ふた、楮箱根の關所に差懸つて右の雲衲は如何するかと思ふて居る七八人分の笠を重ねてスツカリ自分一人が冠つたまま素知らぬ顔で關所を通り越さうとする、スル

と關所の役人が之を見咎めて『笠を取れ』と云ふと『ハイ』と一番上の笠一枚を脱ぐ、又『笠を取れ』『ハイ』と七八遍同じくやつて居る間に遂々笠を着たまゝ、關所を通り過ぎて仕舞ふたとの話ぢやが、昔の雲袴にはコンナ調子で酔でも蒞蕩でも行かん奴が多かつたよ。

其頃名古屋に大會があつた時ぢや、歸り道に近江八景を一覽しやうぢやないかと相談して、袴等七八人の雲袴が春風に吹かれ乍らぶらり〜と摺針峠まで來懸つて峠の茶店で休息した事がある、其折同行の雲袴に一人大の客齋漢があるので一ツ彼奴を困らして遣らうかソリや面白からうと袴が發頭人で、皆々草餅を喰ふは〜腹一杯詰め込んで、錢は今小便をして居る人に貰ふて呉れと言捨てたまゝ、峠を走り下りて、八人分の茶代や草餅代をスツカリ小便したり愚圖々々して居た客齋漢に支拂はせた事があつたよ袴の雲

袴時代にはいろ〜な悪戯を遣つた者ぢや、ナニ雲袴の旅装か、あれは丁度今日の兵隊の背囊のやうに仰山ある荷物を巧みに小さく拵えて、袈裟文庫と共に首の前と後にブラ下げて行くのぢやが、之をブラ下げて居ると却々歩き好いものぢや。

### 三十、盲滅法のカーツ

袴か未だ維僧で妙心寺の僧堂に居た時、此京都の市中へ托鉢に出た事がある、今から考へると寺町頭の天寧寺あたりに曹洞宗の寺があつたが、ホ——ホ——と歩いて行く出合頭に、其寺の門内から一人の和尚が出て來て、指の先に一文錢を搦み乍ら『如何なるか是れ臨濟の家風』と問答を仕掛けよつた、袴は未だ其時趙州の無字位より通つて居ぬ維僧ぢやから大いに弱つたが、ナニ臨濟の

家風なら何日も提唱で聽いて居る喝ぢやらうと、盲滅法に『カーツ』と一喝を遣つた、スルと相手の和尚は『鴉鳴をなす勿れ』と一撈を入れよつたが、袈は飽迄これで押通して遣らうと又『カーツ』と遣つた、今度は『三喝四喝の後什麼生』と打込んで来たが、袈は相變らず『カーツ』と遣つて退けると、向ふは到頭一文錢をチャリンと鐵鉢の中へ入れて『能く護持し去れ』と門内へ這入つて仕舞ふた、昔は折々途中でコンナ問答を仕掛けられるのでウツカリ托鉢にも出られなんだものぢや、イヤ斯う云ふ風に油斷の出来ぬ方が好いのぢや、これも袈の雛僧時分ぢやが、師匠から京都へ行つて新京極の芝居の繪看板などをボカリと口開けて見上げて居ると拘摸から罽丸を取られるぞと教へられたので、正直にもそれから繪看板を見る時には必ずシツカリと罽丸を握つて居たものぢやが、今日の人間

は却々親や師匠の云ふ事でも正直に受取りよらんので、大きくなると酒や女に罽丸を取られる連中ばかりぢや、イヤ甚しくなると此天にも地にも一つよりない大切な罽丸までを質に置く奴があるよ、アハハハ。

妙心寺の快川和尚は武田家、殘黨を隠匿ふたとの事で、織田信長の忌諱に觸れて甲斐の惠林寺で焼殺された和尚ぢやが、其焼殺される折の光景は實に凄まじいもので、百餘名の僧徒肅然としていづれも山門の上に登るやサア今は免れぬ場合ぢや、平生修練の功を現はすのは此時ぢや、皆々狼狽へずに末期の一句を道へとて火焰裏に端座し乍ら和尚の道はれたのが即ち彼の『心頭を滅却すれば火も亦涼し』の一句ぢやが、此事を思へば昨今の炎暑位何でもないナ、モツと暑さが足らん、不二山の雪や北海の氷が熱湯にな

る程暑くならんと天下の愚物は能く悟りよらんテ。  
 檀林皇后の和歌に『唐の山のあなたに立つ雲はこゝに焚く火の煙  
 なるらん』と云ふ幽玄な禪味のあるのがある。又後奈良院も確か妙  
 心寺の愚堂和尚かに参禪した方で雨風の吹き荒ぶ日同寺へ駕を枉  
 げられて『燃ゆる火をわけても法は聴くべきを雨と風とを厭ふべき  
 かは』と云ふ和歌を詠まれたさうぢやが、凡て参禪の學者には此水  
 火を避けぬ熱烈な氣象が入用ぢや。

### 三十一、尊貴の参禪

支那には萬乗の尊貴に在る天子が参禪せられたのは幾人もある、  
 先づ達磨と聖諦第一義の問答をした梁武帝、南陽忠國師に参禪せ  
 られた唐肅宗皇帝の如きは其最なるものぢや、肅宗は其東宮時代

から忠國師に歸依して一時國難に出逢ふて剃髮緇衣を纏ふて居ら  
 れた事もある、『溪欄豈能留得住、直歸大海作波濤』と云ふ偈は其緇  
 衣時代の作で窃かに禪の上から胸中の鬱勃を洩らされたのぢや、  
 後果して大中天子となられた時、忠國師に『百年の後須つ所何物ぞ』  
 と問はれた、國師は『老僧の爲に無縫塔を作れ』と云はれると帝は更  
 に『塔様如何』と問はれる、國師は稍久しくしてから『會麼』と云はれた  
 が帝遂に不會、乃で國師は我が付法の弟子耽源に塔様を問へると  
 遷化せられたので、帝は態々耽源を招じて師の塔様を問はれると  
 耽源も亦『湘の南潭の北』と一句答へた切りぢやとは何と面白い塔ぢ  
 やナ、此無縫塔とはドンナ塔ぢやらうナ、アハ、ハ。

紫野の芋堀坊主を以て自任して居られた大徳寺の菅廣州和尚も  
 遂々遷化せられたが彼の和尚は備前曹源寺の儀山和尚の法嗣で隠



山家である、師匠の儀山和尚は此間も一寸話した通り枕繪を一見して再見せずと云はれた却々の遣手で近世禪林の傑物ぢやつた、其鉗鎚を受けた和尚の事ぢやから腹の方は十分鍊れて居るに違ひない、ウム餘技としては書と弓が上手で、先づ愚直な一方向きの擔板漢と謂つて宜からう、

其愚直な證據には先年菩提會の使僧として鎌倉へ行かれた時にぢや、和尚は紫法衣を纏ふ管長の身分ぢやのに殊勝にも昔忘れぬ雲水の姿をして圓覺寺の宗演和尚を訪ふた處が、宗演和尚は又五分坊頭に琉球縞の着流しと云ふ當世の書生風をして面會をしたのは好いが、一向大徳寺管長としての待遇をせん、雲水坊主の取扱ひをしよつたとて歸京後ブン／＼怒つて居られたので、袷はソリヤ宗演和尚が引掛けたのぢや、アಂತが餘り昔風をして行つたの

で此通り時勢も知らねばならぬと態と書生風をして見せたのぢやらうと云つたが、和尚はイヤ違ふ——と眞赤になつて怒つて居られた其和尚も今や即ち亡しで何處へ行脚せられたぢやらうナ、行衛は『ほの／＼と明石の浦の朝霧に島隠れゆく船をしぞ思ふ』と云ふ人磨の和歌のやうなものぢやナ。

### 三十二、生也死也馬鹿々々

苟も禪坊主の死際には是非遺偈のありたいものぢや、誰ぢやつたか名は忘れたが昔時『生也咄々死也咄々、畢竟如何咄々』と云ふて死んだ和尚もあるよ、袷も臨終にはドンナ遺偈を作つたものか知らん、『生也馬鹿々々、死也馬鹿々々、畢竟如何馬鹿々々々々』とは什麼ぢやらうナ、アハ、ハ、ハ、

日出新聞の談叢に出て居た支那の蒙塾で童子に習字せしむる字格語『一去二三里、煙村四五家、樓臺六七座、八九十枝花』と云ふ詩は無数の數と云ふ處の禪味があつて却々面白いナ、又同じ數字の作詩で『一片一片又一片、兩片三片四五片、六七八片九十片、飛入蘆花都不可見』と云ふのも其結句に大いに禪味があるよ、ナニ明月藏鷺の趣きとも亦違ふが、衲は此詩を讀んでフト思ひ出した話があるよ、言ふて聞さうカナ。

それは一人の托鉢僧が行暮れて或村里の豪家へ投宿を乞ふた、折ふし其夜其家に詩會が始まつて居て、村醫村儒の面々は今や眼までも白黒の平仄にして苦吟の最中ぢや處が僧も素より嗜きな道とて其仲間入りをさして呉れと願ふと皆々コンナ汚い乞食坊主に詩が出来て堪るもんかと心窃かに輕蔑して居た、スルと僧は丁度

其座に出してあつた過去帳を擴げて見て居たが、頓て『七日三萬燈明佛』と遣つたのでソリヤ過去帳の佛名丸出しぢやないかとて滿座大笑ひになつた、僧は委細構はずに又『一超直入禪定門』と承句を置き『寛永元年秋九月』と轉句を付けると皆々此僧を馬鹿にして笑ふ、遂に結句の『樹凋葉落皆歸根』に至つて初めて凡僧でない事を知り、遽かに上座に据えて尊敬したとの話ぢやが、人情は皆コンナ輕薄なもので一向當てにならないものぢや。

### 三十三、一筆申す火の用心

衲の雜僧の折師匠から詩の起承轉結は頼山陽の『京都三條帶屋の娘、姉は十八妹は十四、諸國諸大名は刃で殺す、此是娘は眼元で殺す』の歌謠のやうに詠めば好い、又文章の模範は『金三兩、返すか

返さぬかこれ如何ぢや、返へすと云へばそれで宜し、返さぬならば己れが行く、行くについては只をかぬ龜の甲には骨がある』と云ふ龜と呼ぶ男の貸金催促狀、書翰の手本には徳川家康の家來で鬼作左と呼ばれた本多作左衛門が陣中から妻の許に寄越した『一筆申す火の用心、おせん泣すな馬肥せ』と云ふのに及ぶものがないと教へられたが、座禪をするのも亦斯う云ふ風に簡にして要を得た粉飾のない所が入用ぢや、座禪は心の素地を磨く修業に外ならぬのぢや、此眼元で殺す帶屋の娘、龜の甲には骨がある、一筆申す火の用心には佛祖も窺へぬ所がある。

京都でも百姓が毎朝早く『小便シヨ』と大小便を壬生菜や蕪大根と代へに来るが、九州地方でも大便を餅米と代へる習慣があるそれで禱の雲水時分に此九州で大便の偽造をしよつた奴があつた、そ

れは赤土を捏ねて竹の筒の中へ入れ、ニユーと突き出すと如何にも人間の糞らしくなる、而して百姓を欺して餅米を取りよつたのぢやが、書畫や紙幣の贋物を拵える者はあるが、糞の偽造とは古今只一人ぢやらうとの當時の評判ぢやつた、イヤ番茶に鹽を入れて小便の偽造をした者は未だ聞かんよアハ、ハ。

學者が一寸位座禪をしても、丁度衆盲が大象を評するやうなもので、或者は鼻を撫で、座禪とは長い物ぢや、或者は牙に觸れて座禪とは堅い物ぢやと勘違ひして居るから可笑しい、皆これ大象の本體を得たのでなくホンの一部分を見たか見ぬぢや、苟も座禪を遣つた以上はセメて箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川と云ふ難透難解を踏破した後にならぬと眞個の禪味は會せぬとしたものぢや、初學の内の順風に帆を立てる合頭の禪は易い

が、陸地に舟を行る逆境の禪になると實に容易の業ではない、恰で石に噛り付くやうなものぢやぞ。

僧堂では寢忘れと云ふて時々朝寢をする事はあるが、それでも東山一帯に紫の横雲が棚曳いて少し茜の射し初むる頃には皆々起床する、午前六時頃には早や竹箒を持つたり淨巾を使ふて清掃を始めて居る、寢忘れと云ふてもツマリ在家の早起きと同じ事ぢやが、禪の経験に依ると朝寢を起すのには蒲團をヒン捲るのが一番早いよ、蒲團をヒン捲られるとドンナ狸寢をして居る横着な奴でも、不行儀な寢像を見られまじと狼狽て、飛んで起きるものぢや、中京邊では番頭丁稚に朝顔の世話をさせて早起きを勤めて居るさうぢやが僧堂ではソナナ風流な優しい事はせん、黙つて蒲團をヒン捲るばかりぢや。

人間の死ぬのは恰で殻穿ち雀飛ぶやうなものと云ふてある、ナニ其雀の行衛か、それは碧巖にも出て居る通り馬祖と百丈が山雲海月の情を話しつゝ野道を行つた處が、池の汀に數羽の鴨が下りて居る、鴨は二人の蹀音に驚いてパタ〜と飛び去るのを百丈がア、鴨が飛んだと云ふと馬祖はイキナリ百丈の鼻頭を扭つた、百丈はアツ痛いと思痛の聲を發すと馬祖はそれ見よ鴨は何處へも飛び去つて居ぬではないかと云ふたのと一般、雀の行衛も亦此鴨の行衛と同じ處ぢやが、偕此雀のお宿はどこに在るのか解るかナ。

### 三十四、何をくよくよく川端柳

『何をくよくよく川端柳水の流れを見て暮せ』で人間は此水の流を見て暮してさへ居れば不平も煩悶も起るものぢやないよ、水は暑い

とも寒いとも憎いとも可愛いとも長いとも短いとも圓いとも四角いとも何とも思はずに日夜滔々として流れて居る。趙州が所謂急水上に毬子を打すで岩に逢ふて激するの無心。淵に入つて蹴するの無心。行くとして停滯する處なしぢや『隨流識得性、無喜亦無憂』で、衲は最も水を愛するよ。

昔時弓の稽古をした人がある。それは虱を的にして彼の、と黒い處へ射當てやうと試みたのぢやが、最初の内は却々小さいので目に這入らう筈がない、それが段々修練の功を積むに従ふて遂には虱の的が天地一ばいの大きさに見えて天晴弓術の名人となつたとの話がある。座禪の工夫も亦此虱の的を射落すやうなもので、古則公案が即ち虱の的である。

衲は昨日の朝清水山へ上つて來たが、既に秋色七分ぢやつた。

市中の景色は何時見ても却々好いな、清水山から瞰下して衲のフト感じたのは彼の八坂塔のぐるりに紙を張つて一大走馬燈を拵えたら盃盞盆の送火としては大文字などよりも面白いと思ふたよ、塔を中心にしての大走馬燈を作るのぢやが、其繪は天龍寺の九龍を描いた松年翁に頼めば好いし、此走馬燈は京の市中一面を照して確かに京名物の一つになるに違ひない。

### 三十五、雷雪潭と寶洲

美濃井深の雪潭和尚と云ふのは東福寺の故敬冲和尚等の師匠に當る人で、雷雪潭と呼ばれた程の機鋒峻烈な歴々ぢやつたが、其體は丁度十夜の蛸のやうに極小さい方で講座の際彼の厚い座蒲團を二三枚も敷重ねても未だ見臺の上へ首が届かぬ位のチンコぢや

つたさうなが、或時自身の法衣を美濃から京都の法衣屋へ注文した處が、僅かに二尺の丈なので、法衣屋ではコリヤお雛僧の着用ぢやらうと氣轉を利かした末、襟や袖口に赤い縁の取つた可愛らしい沙彌法衣を仕立て、送ると、和尚は之を見るや其綽名の雷のやうに怒鳴つたとの事ぢや、大人で二尺の法衣とは今の東福寺の和尚よりも最とチンコぢやつたと見えるナ。

それに偶然とは云ひながら當時同國美濃の虎溪には寶洲和尚と云ふ馬鹿に體の大きい人があつて、此和尚と一緒に歩くと雪潭和尚はいよゝゝ小さく見えて貫目がない、處が負けん氣の雪潭和尚ぢやから袷が寶洲和尚を抜いて妙心寺の紫階即ち大和尚の稱號を取つて遣らうと其手續をした、隣山ぢやから早くも之を聞知つた寶洲和尚も亦アンナ小さい和尚に大和尚の稱號を先んせられては

ならぬと是又紫階を受ける手續をする、こゝに井深と虎溪の競争になつて遂に雪潭和尚が機先を制した丈け寶洲和尚よりも早く紫階の大和尚の格式を得たので最う詮様がな、大會や楞嚴行道などに兩和尚の落合ふ時は必ず雪潭が紫法衣を纏ふて一番に威張つて行く、其尻に寶洲和尚が付かねばならぬので寶洲和尚も如何かして一つ雷雪潭を弱らして遣らうと考へた末、楞嚴行道の時になると背後から雪潭和尚の顔をバアと覗く事にしたので、これには流石の雪潭和尚も閉口したとの話ぢやが、此兩和尚の小兒見たやうな無邪氣な争ひが面白いぢやないか。

其様先のは小萩の盆栽ぢやが、それを昵と眺めて居ると高臺寺や大極殿の秋色も這裡に在る、ウム其盆石か、自然に不二山になつて太奇ぢやらう、別に草鞋掛けで不二登山をせずともぢや、其

小さい一個の盆石に妙高二千丈の不二山の趣致があるのを看取せねばならん、不二山と云へばコンナ古人の詩がある、『朝發芙蓉下、夕宿芙蓉下、宿宿二三宿、未離芙蓉下』これは東海道の道中を幾里行つてもく、今日も見え今日も見えけり不二の山で不二山の下を離れて居らぬ、即ちいくら座禪の修業をしても亦自己の心性を離れぬと云ふ處を詠んだものぢやが、仙崖和尚にも、『行脚住は關所通れば又關所五十三次馬の尻の數』と云ふのがある關所とは古則公案の事、それを透破したのが馬の尻の數ぢやが、此馬の尻をひつた時の心地こそ實に春風拂面の境涯ぢやテ。

床の軸は白隱禪師の自畫賛ぢや、茄子三つと刀のやうに描いてあるのが十六大角豆上からブラ下つて居るのが夜市の提灯で、それに『那須の與市十六歳の曠戰』とは面白いナ、昔時の偉い禪僧は

大抵コンナ餘技があつた、殊に近世の禪僧で文才彬彬たるのは矢張り仙崖和尚の右に出る者は無からう、衲は同和尚の畫賛を随分澤山に見たが其中今でも忘れずに記憶して居るのは菊の花の繪に『聽くと雖も而かも耳なし齒有れども而も食へず』又蜆子と云ふて支那の會昌の沙汰に逢ふて川蝦を漁つて居た高僧の繪に『和尚殺生禁斷』又竹の繪に『窓前に竹を植うれば夏日蚊多し』と云ふやうな畫賛があつたが逆もこれは凡骨の企及出來ん畫賛ぢや、禪機文才二つ乍ら揃はねば斯う云ふ風に咳唾球を成さんものぢやテ。

### 三十六 南天棒と一指頭

此頃攝州の宮に留錫して居る南天棒和尚は大勇現前とも云ふべき元氣な和尚で、常に山岡鐵舟居士が道得南天棒道不得南天棒と

書いたのを彫付けた太い、南天棒の拄杖を引提げて濶歩して居た和尚ぢやつたが、先年建仁寺へ見えな時祇が酒前茶後の話の序にアンタは何時までソナ南天棒を持つて居るのか、老體の邪魔にはなりはせんか、鐵舟居士のやうな劍客でも晩年には無刀流と云ふ流儀を始めて、無刀の尊さを知つて居たのにアンタは未だ南天棒がソナに大事なのか、と云ふたら和尚は暗々裡に此言葉を用的たものと見えて、それから断然南天棒を持歩かぬやうになつた、其代り墨蹟を頼まれても南天棒扇面に書畫を乞はれても南天棒の一天張で、此間も此寺へ来て祇が死んだら何卒引導を渡して呉れ、偈語には是非南天棒の三字を忘れずに入れて置いて呉れと頼んで行つたが、此南天棒も亦天龍一指頭の禪の如しぢや。

此南天棒和尚は其雲襖時代に餘程骨を折つた人である、いつも

當時の經驗を笑話にして居るが、それは僧堂に座つて居てチラノ、と眼先に浮世繪のやうな美人の紅い裾や白い脛の優姿が見え出すと、ナニ糞ツ——と龍躍虎嘯のチンボを押え付け乍ら達磨何人ぞ我何人ぞ、コンナ妄念が尻の下へ座断出來ぬやうで此大修業が成し得らるものかと、一生懸命に公案を拈提したとの事ぢやが、此克己心此元氣あつて初めて他日天下の南天棒と謳はるゝに至つたのぢや、今日の青年も亦之を手本として向上の一路に勇猛精進せねばならぬぞ。

座禪も一度は身心脱落するまで刻苦せねば駄目ぢや、身心脱落して後は脱落心身となつての所謂『到得歸來無別事、廬山烟雨浙江潮』の境涯を得られるのぢや、『何處無山秀、何邊無水流、借問東西客、此山水在不』の別天地に入る事が出来るのぢやが、これは逆も



トロイ座禪の仕様では駄目ぢやテ。  
 白隠禪師の號か、それは白拈賊、イヤ晝の白晝にでも隠れて居る、兎の毛も他人に斯心を窺はさぬと云ふ處から付けられた號ぢや、隠の字で想ひ出したが、同禪師の和歌に「コンナのがあるよ、  
 『隠遁の遁を昔に書きかへて昔は遁る今は貪る』、遁と貪の同音の諷刺ぢや。

### 三十七、天狗の隠れ蓑

天狗が隠れ蓑と隠れ笠を着て木の梢に腰掛けて居ると、豆腐買ひに行く童子が笠を冠つて「ヤア鼻の高い天狗さんや」と云ふと天狗は驚いて乃公が此隠れ蓑隠れ笠を着て居るのに見付けるとは何者ぢやらう、ハ、ア彼奴は顔中眼玉だらけぢやナ、それで乃公の此

姿が見えたのぢやらう、と笠の編目を眼玉と思つて、お前の持つて居る眼玉と乃公の隠れ蓑隠れ笠と交換して呉れんか、と遂々笠と隠れ蓑隠れ笠と交換した、聽て童子は豆腐買うて来て裏口へ一寸蓑笠を脱いで置いた間に、家の者がコンナ汚い蓑笠がある、と竈の下で焚いて仕舞うたので、童子は其竈の灰を身體一面に塗り付けると思議や聲ばかり聞えて童子の姿が見えぬ家人は何事した事ぢやらうと驚いて居ると其處にある羊羹が無くなる、饅頭が無くなる其内に童子はア、甘いナと指の先を舐つたので舐つた處だけ灰が剝けた、サア家内中は指の怪物が出来たと大騒ぎした上、俱胝の一指ぢやないが其指の怪物を斬つて退治して仕舞うた、童子はアツ痛いと言いたので此度は顔の灰が涙で剝けて顔ばかり見え出したとの話があるが、白隠とは即ち此隠れ蓑隠れ笠を着て居るを

云ふのぢや、一念起ればスグ天狗の鼻までも見付けられるのぢや。衲が建仁寺の管長に擬せられた時、何遍も逃げ出さうとした事がある、一度江州へ逃げようと思つて相國寺の獨園和尚の許へそれとはなしに暇乞に行つた處が、和尚は早くも之を看破して『江州へ何しに行くのぢや』『ハイ一寸養生に参ります』『ウム江州に限らん、養生禪坊主一生の仕事ぢやないか』と聖胎長養と云ふ處を諭されたので衲も此一言には砒を刺されたうやに感じて忝々しく禮拜して退いた、和尚はいつも斯う云ふ風に下から出る人で、先づ九天の上へ揚げて九地の下へ落さうと云ふ手段に出た人ぢやつた、之に反して東福寺の敬冲和尚はスグ頭から噛付ける人で、獨園和尚遷化の折ぢやつたか、敬冲和尚も出て來て居られたので、衲はお愛想の積りで『追々老宿が亡くなられるが和尚も自愛して下る』

欠

MISSING

の折ぢやつたか、翁も參詣して居たが、式後禿等の茶を飲んで居る前へ遣つて來て『默雷さん、私は此間から九州を繪行脚して歸りましたが、博多聖福寺の仙崖和尚の畫を見て感心しました、コナ面白い畫がありました』とスグ腰の墨斗を取出して禿の未だ一口も飲まぬ高坯の茶を亂暴にも筆洗にしてスラ／＼と描いて見せた事があるが、これが無邪氣で面白い、畫筆を取ると直ちに三昧に入る、眼中人を空うする獅子王の威が現はれる、成程一藝に達して居るだけに凡骨ぢやないナと感心した事があるよ。

京都にも畫家が蛙子ほど澤山居るが、『繪に描いた梅は香もよし色もよし』と云ふ此色香を描き切るほどの畫家は幾人あるぢやらうナ。

## 三十九、鯖の頭の鑑定

コナ面白い話がある、或魚を見た事のない山間の僻村へ鯖の頭を持って行た者があつた、スルと村人はこれは何ぢやらうサア何ぢやらうと村中の問題になつて、遂々檀那寺の和尚の智慧を借りに行くのと和尚は一見してハ、アこれは鱒口佛器ぢやと鑑定する、次に鎮守の神主に見せるとイヤこれは蛭子様の刀の柄袋(鯛)を蛭子様の刀の柄袋と思ふつて居るからぢや)と判断したとの笑草があるが、座禪にも近頃相似の禪と云ふ奴が多くて困つたものぢやテ。猫が何故ニヤンと鳴く鼠が何故チユウと鳴く、雨は何處から降る、風は何處から吹く、ナゼ生薑は辛い、ナゼ砂糖は甘い、ナゼ痛い、ナゼ痒いと云ふやうな試験問題は今日の大學にも無いぢや

らうが、コナ試験問題を出して一つ天下の人心を驚かしたら嘸かし面白からうと思はれるナ、アハ、。

祖師達磨が斷臂の慧可に對つて『與汝安心竟』と云つたのはこれ慧可に心印を與へたので、座禪の心印は滴々相傳、祖師以來今日に至るも尙盡きぬのである、それで禪家でも最も其系統と禪風を尊重する、後世祖師の衣鉢を傳へ、如意拄杖を與へ、印可證明をするやうになつたのは、世の相似の禪と甄別する爲め、ツマリ其系統を尊重する所以ぢや、一穗の毒烙を萬世の下に吹滅さぬ用心ぢや。

世の相似の禪を遣る奴は其門内をも窺はずに濫りに白隠禪師の禪風は無理である不自然であると誹謗するが、眉鬚の墮落せぬのが不思議ぢや、彼等は理智一枚に偏して『柱裏に入れ』とか『天の星を

敷へよ』とかの公案になると、イヤ人間業でソシナ事が出来るものか、手品輕業ぢやと一言に貶して居るが、決して無理でも不自然でもない、茶釜から不二山を出す事も、千里向うの燈火をも吹き消す事が出来る、此修業ほど合理自然なものはない、併しこれは是等の古則公案を踏破した獅子兒にして初めて妙味を知る事を得るのでや。

座禪を譬へると丁度蛇が竹筒へ入れられたやうなもので、公案は竹筒、學者は蛇ぢや、曲つては到底出られぬ、嫌でも眞直に這出さねばならぬ、即ち正念を持続さする修業であるのぢやが、これに無理不自然があつて堪るものか、一つ竹筒を出ると又竹筒がある、斯くて大解脱をした處が即ち歸家穩座で、其時は曲つても歪んでも中道を失はず、堯天蕩々たるものとなるに至るのでやぞ。

それに此修業もせず徒らに難解の碧巖を讀んだり無門關を讀んだり自分免許の文字座禪のみをして居ては、若し邪道へ踏み込んで居ても到底自ら其邪道たるを知る事が出来ぬ、それで晨參暮參入室をしてこれを滴々法脈を傳へて居る師家の鉗鎚を受けて正して貫はねばならぬ必要が起るのでや随つて祖師關を透破するの必要があるのぢやテ。

師家の一言一句は悉くこれ塗毒鼓、鳩鳥尾ぢや、決して聽捨てにしてはならぬ、或時は抑下の卓上を瞎漢と貶して褒める場合がある、或時は卓上の抑下でエラエ者ぢやと褒めて貶する場合がある、それで師家と相見する時は戰陣を張る積りで餘程禪をシツカリめて居らぬと知らぬ間に畢丸を奪られて仕舞ふのぢや、アハ

## 四十、娘嶋田は寢てとける

彼の白隠禪師の不二山の畫賛は「不二の白雪や朝日で解ける」と上の句だけを書いて故意と下の句を現はさぬのに妙處があるを、「不二の白雪や朝日で解ける」までは釋迦牟尼が四十九年の説法を指すので、ここまでは誰でも解るが、下の句の「娘嶋田は寢て解ける」に至つては、これ拈華微笑の教外別傳で座禪の妙處ぢや、斯う「娘嶋田は寢て解ける」と云ふと天下の人間はスグ娘嶋田に執着するぢやらうが、此娘嶋田は普通の娘嶋田と違ふのぢや。

昨夜此慈視閣から東山を上る明月を見たが何とも云はれぬい、景色ぢやつた、明月で想ひ出したが、昔卓首座と云ふのは頗る機智のあつた和尚で、詩人學客と俱に夜月の夜舟遊をして、サア詩

作をしやうと分韻をした時卓首座には六ヶ敷い亦の韻が當つた、處が首座は酔倒して鼯雷の如く、皆がこれは能う作られまいと思つて居た時に、首座は起き直つて「嘯暗洞庭赤壁昔、吟懷須磨明石夕、年々三五一輪秋、詩賦新成今宵亦」と遣つたとの事で一座何れも其機智に驚いたとの話ぢや、ソマリ鼯雷の如く寢て居ても少しも油断せぬ處が感心なのぢや。

これは袷が未だ筑後の梅林の僧堂に掛錫して居た時に聞いた事實あつた話ぢやが、久留米の町に草川一二三と呼ぶ元神主を勤めた人があつた、或日其家の下女が髪をおどろに振亂し眞青な顔付をして「旦那さん山葵おろしが眼を刮きました」と凄い〜事を云ふ、主人は「ナニ山葵おろしが目を刮いた、ソリヤ山葵おろしには目があるからナ」と別に不思議がらぬので其日は濟んだ、スルト又次の

日下女がキヤツ／＼と逃げ廻りながら『旦那さん鍋が歩いて來ます』と怖がる、主人は『ソリヤ其筈ぢや鍋には三本も足があるからナ』と矢張り氣にも留めぬので妖魔の窺ふ隙がない、スルト又次の日今度は『旦那さん火鉢に大きな松茸が生えました』と云ふ、こゝで『ソリヤ焼松茸の幽霊ぢやらう』とでも云へば好かつたのに主人はグツト此焼松茸の返答に行詰つたのと餘り度々の事に遂々其日から神經を病み出して寢付いたとの話があるか、元來正法には不思議無しで、正念相續の大切な事は此怪談の主人と下女の間答によつても解るツマリ最初は主人が正念で勝つて居たが、正念を失うてからは下女に負けたので、一念起れば飽迄も初一念を貫くのが肝心ぢや二念三念に移つてはこれ最う心が百鬼夜行の化物屋敷になつて仕舞ふて居るのぢや。

イヤ一念を起しても悪い、一念を起してもスグ他人から窺はれるとしたものぢや、彼の洞山和尚を土地神が一見したいと付纏ふて居た時、いつも庵前庵後にばさ／＼と落葉を踏む音ばかりはするが、一向姿が見えぬ、處が或日厨の前に米粒が翻れて居る、それを洞山和尚が見付けて一粒の米も重き事須彌山、誰がコンナ不陰徳をしたのか、とチラリと一念を起した刹那土地神が『ヤア洞山和尚とはアンナ男か』と一見して便ち禮拜したとの事ぢやが、洞山和尚のやうな古徳でも一念を起すとスグ土地神から窺はれたので、學者は以て正念相續の大切な事を知るべしぢや。

一粒の米も重き事須彌山ぢやが、此洞山和尚の處で雪峰和尚が飯頭となつて居た時ぢや、頻りに米を磨いで居るのを偶々洞山和尚が見付けて『砂を淘つて米を去るか、米を淘つて沙を去るか』と問



ふた、ヌルト雪峰は言下に『沙米一齊に去ると』米をぶつちや返して仕舞ふ『米を抛つて大衆は什麼を喫ふのかと』洞山が一喝すると、雪峰は盆をひつくりかへした事が碧巖に出て居るが、昔の坊主は却々思切つた事を遣るものぢやナ。

#### 四十一、長は長短は短

翠微禪師に僧が祖師西來の意を問ふ、と禪師は竹林の中へ連れて這入つて此竹は長い、此竹は短いと指されたので其僧は豁然と大悟した、又深山の古徳に同じく僧が祖師意を問ふた時に、古徳は此石は大、此石は小と云はれた一言で其僧も悟つたさうぢやが、長は長、短は短、大は大、小は小でドンナ事を悟つたのぢやらうナ、アハ、ハ、ハ、ウム床の畫軸か、それは竹の繪に『香巖於是敗闕』と

賛がしてあるのぢや、香巖の擊竹も此敗闕と云ふ處を知らねばならぬよ。

鳥尾得庵居士はいつも碧巖集や無門關を讀んで、これも解つて居る、あれも解つて居ると其古則公案の頌語に『鬼も十八蛇も二十』とか『樺木で腹切る血の涙』とか云ふいろは譬へを置いて居られたが、いろは譬への座禪とは面白いナ、アハ、ハ、ハ。

苟も座禪を遣る學者は先づ赤子に生れ變つて來ねば駄目ぢや、學問を鼻に掛けて居るやうでは逆も駄目ぢや、それで禪は此間から參禪して居る末廣博士にも一切書物などを讀むナと云ふて呉れたら、博士は正直に赤兒になつて出て來て居るよ。

織田有樂齋の弟に東山道入と云ふのがあつた、これは一寸座禪の出來た人で、今の圓山左阿彌の處に草廬を結んで居たさうぢや、

此東山道八が顔輝の達磨の繪に『昔は達磨今は道八』と贊をした軸物が今でも塔頭の正傳院の什寶として残つて居るが、昔は達磨今は道八とは却々凡骨の道へぬ素破らしい一句で、達磨を尻に敷いた獅子吼ぢや、イヤ此道八は五條阪の陶器師高橋道八の先祖でも何でもないよ。

大分冬めいてそろ／＼爐を開かねばならんやうになつたナ、ナニ『飄々と落葉となれば面白』と云ふ發句を詠んだのが、落葉と云へば日蓮上人が龍の口で斬罪に處せられんとせられたのが丁度十月の十三日、落葉片々たる時節ぢやつたので、其落葉が他人の眼には恰も金波羅華のちらつく如く不淨役人の持つて居るつく棒さす又までが紅白の蓮華の咲き匂ふやうに見えたさうぢやが、併し座禪の上からはスグ今でも此一枚の落葉が七寶莊嚴赫灼たるもの

に見えるが什麼ぢや。

昔時から京都は京師と呼ばれて何事も全國の師表と仰がれて居たもので、京都人と云へば田舎では大持てに持つたものぢや、イヤ京女ばかりではない京男でも持つたものぢやが、併し九州地方では京言葉には可笑しい訛があるとしてコンナ流行歌があつたよ、それは『大根と刎ぬべき者を刎ぬもせずいらぬ午莠に茶袋哉』と云ふのぢやが、成程京都人はダイコンをダイコと呼びゴボウをゴンボウ、チャブクロをチャンブクロと訛つて居るからナ、アハ、ハ、ハ。

訛は禪を眞言ぢやと思ふて居る、其言事には幽玄微妙測るべからざる醍醐味があるからぢや、或則に月と籠ほどの違ひではない花と櫻程の違ひ、大釜と禿毫ほどの違ひぢやなど、の言事があるが、サア此言事がぢや、實に一種の眞言と謂ても好いものぢやテ。

坊主が戒名を付けるのは詩や歌を作るよりも六ヶ敷いものぢや  
テ、禿の知つて居る或無學文盲の和尚があつた。それが死人に戒  
名を付けて呉れよと乞はれた時、卽座にオイソレ戒名が考へ出せん  
處が其檀家に折好く大豆三斗と書いた札があつたのでコリヤ好い  
物を見付けたと早速大豆三斗を逆まに讀まして『豆大斗三居士』と遣  
つて退けたと云ふ笑話がある。又これも九州で一廉學問のある和  
尚が『以外立心居士』と骨を折つて戒名を付けた處が、其檀家の者等  
はこれを讀んで以外に心の立心居士とは怪しからん戒名ぢや、死  
んだ佛は決してソナナ悪人ではありませんと大いに怒つたので、  
其和尚もソナナ更に『以外傳心居士』と付け代へたと云ふ滑稽譚も  
あるよ。

#### 四十二、萬疊青山隱古鏡

我が心ほど不可思議なものはないナ、歌人は座ながらにして名  
所を知ると云ふが、天の橋立も奥の松島も皆此心の裡にあるのぢ  
や、『三五夜中新月色、二千里外古人情』とは却々イ、詩ぢやが、此  
月や此古人は何處から出て來るのぢやらうナ、了賦禪師は萬疊青  
山隱古鏡』と云ふて居られるが、此古鏡には青山ばかりではない宇  
宙の森羅萬象が隠れて居るのぢや、禿の今夏杜鵑を詠じた詩にも  
『縱令禪心無所着、卒然惹得古人情』と云ふのがあるよ、卽ち釋迦も  
達磨も文殊普賢もことごとく此鏡裏に隠れて居るので、オイと喚  
べばハイと出て來るのぢや。

當地の中井三郎兵衛の別荘守に面白い老爺が居る、大の本願寺

凝りて是迄妙心寺の寺僕をして居つたのぢやが、本願寺へ參詣するの不便ぢやとて暇を取つてから此別莊の掃除番に雇はれたのぢやが、本願寺へ參詣する日にはドンナ用事があつても振顧りもせず塵取も箒も其處へ抛つて置いたまゝ、サツサと出て行く、主人の三郎兵衛がお前の齡は幾才かと問ふと白髪でありながらハイ四十五までとす、名はと聞くと妙心寺では御爺さん、國では皆が長さん／＼と呼んで居やりましたと答へたさうぢやが面白いナ、今日にもコンナ堯舜以上の逸民があるかと思ふと實に太平蕩々たるものぢや。

我が臨濟宗では昔時は餘り讀經念佛などはせなんだものぢや、今日の如く讀經念佛をするやうになつたのは彼の元寇襲來の時代から始まつた事で、ツマリ敵國降伏怨敵退散の祈禱を所謂舉國一

致で遣つたのが、其ま、讀經念佛の風を馴致したのである、禪坊主たる者は元來讀經念佛などの弱音は吐かん、只座禪一卷になつてさへ居ればそれで法燈赫灼、一切藏經悉く這裏に在りとしたものぢや。

東福寺の開山聖一國師は目は眇でも却々の大徳であつたが、其遷化になつた際の事ぢや、同寺の門前にお薩婆のやうな一人の婆子が住んで居て、國師の遷化につき僧堂で鉦を鳴らし讀經念佛を始め出したのをフト聞き答めて、ハア聖一さんも死なれたさうな、鉦がガンお經がアヂヤボヂヤカボチャと聞え出しては最う東福寺も駄目ぢやと云つたさうなが、煙を見て火なる事を知り角を見て牛なる事を知る、カシンの鉦の音で早くも僧堂の座禪に惰氣の生じたのを勘破した此婆子の一言は實に恐しいテ、ナニ婆子の名

前か、名前は只門前の婆子とあるだけで解らぬが多分勸學寮の雀論語を囀るで、永年東福寺の門前に住んで居たため自然國師と顔馴染になつたりして、屹度座禪も下手な雲水よりは出來て居た婆子には違ひ無からう。

白隠下の狂僧として八釜しい筑後の長堂和尚と云ふのがあつた、此和尚は平生何十匹となく近所の野良猫を集めて來て、其猫に座禪をさせて居た和尚ぢやつた、處が猫は生きて居る、人間の言葉は通せぬ、いくら座禪をさせやうと思ふてもズグ動き出すニヤンと鳴き出す、御師家を以て任じて居る和尚の自由にならぬ、これでは成らんと警策を廻してサア骨を折れ〜と云ふても猫は相變らずニヤン〜と騒ぐばかりなので、和尚は僧堂の清規ぢやつてピシリ〜と猫に痛棒を喰はす、遂に何十匹と云ふ猫を悉く撲殺

したとの事ぢやが、縱令狂僧になつても座禪の事だけは忘れぬのが哀れぢや、衲なら生きて居る猫などよりも拂子とか如意とかの愛玩品をズラリと並べて眺めて置く、若し酒色を好む和尚なら禪利禪士盃居士お酌大姉などを座禪させて置くぢやらう、アハ、ハ、ハ、

#### 四十三、 閻齋と景樹の禪

今度位階追贈の光榮に浴した山崎閻齋先生は元妙心寺の雜僧であつたのぢやが、其後儒學に志して坊主を廢める時、コンナ木佛が何の用に立つものんかと、本尊に弓を射放して妙心寺を遂電したが、これ蛇は寸にして人を呑む概があるのぢや、彼の歌人の香川景樹翁が參禪辨道したと云ふ鎌倉の誠拙禪師が未だ雲水坊主で行脚に出懸けられる折、鶴ヶ岡八幡宮へ詣で、ドーか此大修業が

成就出来ました曉にはお禮として碧嚴録の提唱をお聴せ申しますとの誓願を立て、出立したさうなが、後來其修業が出来上つた時約束の如く八幡さんに碧嚴録の提唱をして聴したと云ふ話があるが、神佛へ參詣してもコンナ誓願を立て、こそ神佛も喜ばれるのぢや。

此誠拙禪師は却々和歌が上手ぢやつたがこれは香川景樹翁に就て學ばれたからぢやらう、ナニ景樹翁の和歌に『ふりにける池の心は知らねとも今も聞ゆる水の音かな』と云ふ芭蕉の賛があるのか、此古池の水音は容易に聞かれぬ天籟ぢやが多分誠拙禪師の爐鞴に入つたので解つたのぢやらう、一圓相の上に『我こゝろうちかへし見よ天地は空しき外にさく聲もなし』と題した和歌があるのか、それは隻手音聲の公案を透つた時の投機の偈ト云てもよからう、景

樹翁の居士名を在焉と云ふのか、それはこゝにも在る、こゝにも在るこゝにも在ると云ふ意味で流石に誠拙禪師の付けられたゞけに餘程面白いナ。

眼は花紅葉が見える、口は鯛や鱧が喰へる、鼻は名香を嗅ぐ事が出来る、其他手でも足でもそれ〴〵樂みはあるが臍に至つては一番ツマラヌ役廻りぢや、いつも帶の下の眞闇がりに蟄居させれて、明るみへ出るのは只風呂へ這入る時ばかり、雷が鳴るとて心配したり腸加答兒が起つたとて痛い目したり、日々碌な事は無いにも拘はらず住めば都と晏然として居る、丁度京都の人間も此臍のやうに引込思案ばかりして少しも進取活動の氣象がなく、萬事住めば都と諦めて居る様子ぢやが、これでは眼や鼻は勿論ズツト下の罌丸にまでも笑はれはせまいかと思ふよ、アハ、ハ、ハ、

### 四十四 禪宗の四十六流

禪宗の二十四流と云ふのは誰でも知つて居るが、四十六流傳來の系圖は知る者極めて稀れぢや、これは小僧は勿論大僧にも知らせて置きたいので、此間禪宗記者にも一寸書いて送つて置いた、併し廿四流も此四十六流も今は名ばかりで眞個の正流正脈は纔かに開山の一系存するのみぢや、妙心開山三百年忌(今よりも百五十年前)愚堂國師の香偈に「廿四流日本禪、惜哉大半失其傳、開山頼有愚堂在、續焰聯芳三百年」と云はれた通り、此時代からも已に大半禪流が混流して居たものと見えるテ、其四十六流の系圖とはコナものぢや、

四十六流系脈傳來の系圖を省く

- 臨濟十六世 京、建仁明菴策西禪師(虛菴懷敏の嗣)千光祖師
- 曹洞十四世 越前、永平道元禪師(長翁如淨の嗣)承陽大師
- 臨濟十五世 京、草河勝林天祐思順禪師(北澗居簡の嗣)
- 臨濟十七世 京、東福辨圓爾禪師(無準師範の嗣)聖一國師
- 同 奥州、圓福性才法心禪師(同上)
- 同 洛北、妙見堂道祐禪師(同上)宗覺禪師
- 同 相州、建長兀菴普寧禪師(同上)
- 同 越後、玉泉了然法明禪師(同上)
- 同 相州、圓覺無學祖元禪師(同上)佛光圓滿常照國師
- 臨濟十六世 紀州、興國心地覺心禪師(無門惠開の嗣)法燈國師
- 臨濟十七世 相州、建長蘭溪道隆禪師(無明惠性の嗣)大覺禪師
- 臨濟十六世 駿州、清見聖禪無傳禪師(荆叟如寶の嗣)

臨濟十八世 相州 勝樂東傳正祖禪師(笑隱大訴の嗣)

● 同 相州 淨智大休正念禪師(石溪心月の嗣)佛源禪師

○ 同 相州 淨智無象靜照禪師(同上)法海禪師

● 同 信州 安樂樵谷惟仙禪師(別山祖智の嗣)

○ 同 京兆 建仁鏡堂覺圓禪師(環溪惟一の嗣)大圓禪師

○ 同 相州 建長南浦紹明禪師(虛堂智愚の嗣)圓通大應

○ 同 國師

● 同 相州 禪興巨山志源福師(同上)

● 同 洛東 勝林圭堂瓊林禪師(虛舟普庫の嗣)

● 同 相州 建長西礪子曇禪師(石帆惟愆の嗣)

● 同 京師 南禪一山一寧禪師(頑極行彌の嗣)妙慈洪濟

● 同 國師

同

● 曹洞十五世

● 曹洞十六世

● 臨濟十八世

● 同

● 臨濟十九世

● 同

● 同

● 同

● 同

○ 同

相州 建長東里弘會禪師(月潭智圓の嗣)

相州 建長東明惠日禪師(直翁德舉の嗣)

京兆 南禪東陵永瓊禪師(雲外雲岫の嗣)妙應光國

惠海慈濟禪師

相州 建長靈山道隱禪師(雪岩祖欽の嗣)佛惠禪師

京師 建仁清拙正澄禪師(愚極至惠の嗣)大鑑禪師

京師 南禪明極楚俊禪師(虎岩淨伏の嗣)佛日焰惠

禪師

京師 南禪竺仙梵仙禪師(古林清茂の嗣)

京師 長福月林道皎禪師(同上)普光大幢國師

相州 建長石室善玖禪師(同上)

京師 建仁別傳妙胤禪師(虛谷希陵の嗣)



臨濟二十世 丹波、高源遠溪祖雄禪師(中峰明本の嗣)  
 同 壹岐、安國無隱元晦禪師(同上)法雲普濟禪師  
 同 京師、眞如明叟齊哲禪師(同上)  
 同 甲州、棲雲業海本淨禪師(同上)  
 同 相州、建長古先印元禪師(同上)正宗廣智禪師  
 同 常州、清音復菴宗已禪師(同上)大光禪師  
 同 關西、義南菩薩(同上)  
 ○臨濟十八世 京師、建仁中岩圓月禪師(東陽德輝の嗣)佛種惠濟  
 禪師  
 臨濟廿一世 遠州、奥山無文元選禪師(古梅無友の嗣)  
 同 肥後、國泰以亨謙禪師(見心來復の嗣)  
 同 相州、建長大拙祖能禪師(千岩元長の嗣)廣圓明鑑

○臨濟二十世 禪師 藝州、佛通愚中周及禪師(休契了の嗣)佛徳大通  
 禪師  
 臨濟卅二世 宇治、黄檗隱 隆琦禪師(中峰明本十四世の孫)普  
 照禪師  
 曹洞廿九世 常州、祇園與儻心越禪師(笑楷道楷廿二世の孫)  
 右

二十四流 ○南詢の十一師  
 ●東渡の十三師

- (一) 明菴榮西
- (二) 永平道元
- (三) 辨圓圓爾
- (四) 心地覺心
- (五) 道隆蘭溪
- (六) 兀菴普寧
- (七) 大休正念
- (八) 無象靜猗
- (九) 無學祖元

●(十) 一山一寧 ○(十一) 南浦紹明 ●(十二) 西礪士曇

●(十三) 鏡堂覺圓 ●(十四) 靈山道隱 ●(十五) 東明惠日

●(十六) 清拙正澄 ●(十七) 明極楚侯 ○(十八) 愚中周及

●(十九) 竺仙楚仙 ○(二十) 別傳妙胤 ○(廿一) 古先印元

○(廿二) 大拙祖能 ○(廿三) 中岩圓月 ●(廿四) 東陵永璵

二十四流略傳に云く、東里會、了然明、妙見祐、天祐順、樵谷仙

東傳祖、無隱晦、明叟、哲は皆嗣なきが故に除く、復菴、己は四子一

孫にして斷絶する故に除く、遠溪、雄、月林、皎は中世兒孫微なるが

故に除く、以亨、謙、石室、玖、無文、選は兒孫ありと雖も官刹に住せ

ざるが故に除くとあり。

官刹とは五山十刹と云ふ乎、然れども石室、玖は前にも記する如

く建長の住持なり、建長住山は右廿四流略傳編輯以後のことな

らんか、無文、元選の奥山も維新前は官刹なり。

性才、心、聖禪、傳、巨山、源、勝林、林、業海、淨、關西、南、隱元、琦、與

儔、越の八師は一切に論なし云々とあり。

### 四十五 禪とは什麼生

老師を訪ふて禪とはドンナものかと問ふた、丁度雨の降る日で障紙の外の軒端にポツ／＼點滴の音がする、老師は靜かに薄茶を立て、夜の梅を出して呉れられる、雨が降ると鬱陶しいナ、禪とはソレ彼の點滴を聽いて居ると仕舞に點滴が我か我が點滴がと云ふ無我の境に入る之れが禪だ、解たかな、

ナニ新年か、新年とは何ぞ、我宗には過去も無し現在も無し未來も無し況むや新年をやだ、真空の又真空ぢや、今日も大阪の新

聞記者が佛教に現はれた羊の談をして呉れよと頼みに来たが、禪語には羝羊籬に觸るとか、佛典中に羊車、鹿車、牛車など云ふ語もある、又蒙求に仙人が荒野の石を杖頭で指點すると皆それが羊に化したと云ふ故事もあるナ、ナニ有形上の禪宗の將來か、アハ、それは寺も坊主も悉皆無に歸して仕舞ふよ、イヤ最う無に歸して居るのぢや。

三千世界を空巢と見做し

獨り朝寢がして見たい

#### 四十六 達磨峰の一句

臘八の前數日、默雷老師を健仁寺の賊庵に訪ふ、默雷即ち談雷、爐邊に兀座して茶話盡きざること數千言、暑移つて爐火の紅葉已

に冷かなる白雪となるをも知らず。

大分寒くなつたナ、歳寒うして心の貧なるを覺ゆ、モット爐邊へお寄り、薄茶を上げようカナ、喫茶去、これも一つの公案ぢや、什麼ぢや、骨折つて居るカナ、最う臘八も數日の中に近いて来た、臘八には禪堂に坐つて十分骨を折るが好い、臘八とはナ、釋迦が東方に明星の紫に輝くのを見て大悟徹底せられた日ぢや、それで十二月の朔日から八日までを聖き一日と看做して一睡もせず接心をする、此寺は新曆ぢやから未だ寒くなくて凌ぎ易いが田舎寺の舊曆では寒い、併し寒に處して寒を忘れる、所謂『禪楊夜闌冷於鐵。半窓月帶梅花來』と此臘八の心境ぢや。

臘八の間を長坐不臥と云つて學者が間斷なく參禪に来る、いはば百萬の魔軍が関を揚げて襲來するが如し、之に當る神將は禱が

一人ぢや、兎の毛の油断も隙もあつたものぢやない、獅子一吼――百萬の魔軍を敵手にする、貴郎などの獨參の仕方は恰で遠矢で戦争して居るやうに思ふが什麼ぢや、單刀直入蕙然として王陣に迫つて來ねば駄目ぢや、遅臭い、劍去て久しと云ふ遣り方ぢや、アハ、。

『冬籠る默雷さんや建仁寺』私はコンナ俳句を作りましたがと云ふと、アハ、説不説と云ふ處を咏んだのかな、裨も今日一句唸つて見た、それは

#### 面壁の姿に似たり雪の比叡

と云ふのぢや、達磨の畫賛ぢやが解るかな、彼の比叡山を紫野大徳寺邊りから望むと達磨面壁の姿に見える、それで比叡山を達磨峰と稱して居る、此句は比叡山を雪達磨に看做した句ぢや。

### 四十八 建仁寺十勝

此建仁寺には十勝と云ふのがある、それは足利將軍が東山へ上つて瞰望せられたと云ふ慈観閣、それから大悟堂と云ふ道場、群玉林と云ふ學林、禪居の無盡燈、今も殘存して居る境内の蓮池が洗鉢池、山門の望闕樓、開山の入定塔、大燈國師が道行く人を深山木と觀せられた五條橋、加茂川の水、清水山、之を建仁寺の十勝と云つたが、今日は已に大半空に歸して居る、其蒼茫たる空に舊時の壯觀を描いて此十勝を俳句に咏めば什麼か、裨も咏むで見積りぢや。

床間に手に經卷を持てる文殊の畫軸あり、耳を傾けて亦老師の茶話を聴くもの、如し、老師指して曰く、あれは苦を樂と觀じ樂

を苦と観せる顛倒の人界を正さんとする清涼の文殊ぢや『臘八に近し文殊の像掛けて』か、アハ、イヤ翌日から出山の釋迦の像と掛替える積りぢや、其前に在るのは俗に蝟脚の香爐〜と呼びで居るが、實は鳳凰に象つたものぢや、彼の八脚のやうなのが即ち鳳凰の翼ぢや。

此頃東京では碧巖會を組織して居るさうだが、天下の大政イヤ我が京都の市政に與る人々にも大いに此禪味に染指して貰ひたいものだ、併し之を毒使悪用されたら困るが、兎に角英雄豪傑などには生れながらにして禪機があるよ、禪は彼の亞拉比亞のマホメットには大いに禪機があると思つて居る、冷々頑石の如く黙すること數十年、一たび起てば風雲を叱咤して其勢ひ端睨すべからざる概がある、殊にコーランか劔かと絶叫した處は這裡活殺の利劍

と一般ぢや、此利劍を眞向大上段に振り翳して宇宙を粉碎し乾坤を微塵にし、釋迦を殺し達磨を殺すに非ざれば眞正の宗教は活現しないぞ、一切の經典一切の法門を破壊するに非ざれば眞正の宗教は復興しないぞ、それで禪は此間雜僧にも滅禪宗興と命名して遣つた、即ち禪宗を滅せざれば禪宗は生せない。

#### 四十八 乾坤一擲の仕事

茶を啜つて談盡く、談雷即ち默雷、余曰く話頭盡きし時の餘情如何ぞと、老師曰くサア今迄の環の如き話頭は何處へ消えた何處へ行た、ナニ無に歸した、面白いものぢやナ『荒磯の岩に碎けて散る月を圓かに載せて歸る浦波』これが説不説の境涯と云つてナ、釋迦もあれほど説法して最後に一字不説と宣ふて居る、之を聽いて

呆然自失した羅漢もあり、默契して起舞した羅漢もあるよ。  
 禪も一度はナポレオンや成吉思汗のやうな乾坤一擲の事業をして見たいと思つて居たが、最う人生五十年を超ゆること五ぢや、餘生幾干もなしぢや、併し生變つて大仕事をする積りである、却々氣が長いぞ、アハハハ。

建仁寺には歴代學者が出た、五山文學者の中にも最も學者が多かつた。如何か今日も古への五山の二に耻ぢないやうにしたいイヤ學問は兎に角此豆の如き熾火の紅を永劫に絶したくはない。昔時一人娘を嫁に遣らうと思つて娘にコンナ事を云つた母親がある、サア今度の縁談は二軒一緒になつた、一方は金持で一方は美男ぢや、お前はドチラへお行きになる心かな、ソリや母親の前でも言悪くからう、それでは金持の方へ行きなければ左の肩、美

男の方へ行きなければ右の肩をお脱ぎと云ふと、娘は耻かしさうにクルリと双肌を脱いだ、母親も呆氣に取られてそれでは話が出來んどチラか一軒に極めんと困ると云ふと、其娘はハイそれでは晝は金持の方へ参り、夜は美男の方へ行きたくらうと云ふと、と云つたとの話があるが、此娘の言葉には人情の偽らぬ處があつて却々禪機があるよ。

禪はコンナ狂歌を作つたよ『何事も見ざる言はざる聞かざるも思はざるには及ばざるなり』と云ふのぢやが、アンタには大分法螺を聴かしたからナ、これでは言はざるぢやない、能言能見能聞の猿ぢやアハハハ。

雲門の會下に香林と云ふのがあつた、一々雲門の言葉を紙衣に録して保存して居たが、此の「禪機」もソリ其紙衣のやうなもので

仕舞ひには面白いものになるぢやらう。

### 四十九 默雷禪師の偈

丁未歲晚

八街車馬逐鹿緣。夜欲三更人未眠。獨有山房無個事。一杯茶味坐忘年。

又

今夕是何夕。閑眠且曲肱。甘言非我志。毒語受人憎。役々雪填井。營々風繫繩。擡頭耶點檢。往事總鑄氷。

戊申歲且示衆

弟昆各自要承當。佛法新年不覆藏。松樹社頭呈瑞色。梅花屋角放清香。

### 禪機終

## 參禪餘錄

菰 堂

### 一、坐禪の俳味

默雷和尚より趙州無字の公案を授かつて來て草庵で坐禪を始め、先づ左の足を以て右の足を壓すだけの半伽趺坐と云ふ奴で丁度運坐の時の沈吟の體である、見て居る細君がクツクツと笑ひ出した。

俳句が美を直覺するやうに、坐禪は眞を直覺するのだナ、とスグ理窟に陥つて肝腎の無字がお留守となる、なか／＼趙州の心地に入れない、眼を閉づれば黒山の鬼窟、目を開けばオイ小兒が洋

燈に行當るぢやないか、玉露一杯入れてお呉れなど、什麼しても人間を脱却出来ない、羅漢にも菩薩にもなり切れない。

三日目に默雷和尚を訪ふて答案を示すと和尚は手を拍て笑つて、答案を新聞の原稿用紙に書いて來たのが、これは白雲萬里ぢや、禪は生きて居る、死んだ文章では駄目だ、若し文章で事が濟むなら禪學の通信教授が出来る、併し當らずと雖も遠からずぢや、向上の一路得て居るが、未だコンナ事では禱が一拶を加へたら屈古垂れる、モット確乎工夫して來いと喝破せられた。

又數日經て今度こそは和尚を問さうと出懸けた、此日は秋雨が芙蓉の花にそぼ降つて心地が何となく清々しい、庵室へ通ると柱の拂子に秋の蠅が止つて、清癩鶴の如き和尚が爐邊に靜坐して居られる、瓶に秋草が挿してあるので、老師は花がお好きですかと

尋ねると、花が無いと淋しいからナ、禱は朱紅や濃紫の西洋花は嫌ひぢやと答へられる、それから少焉淵黙を守つて居ると公案は什麼だと口を切られる、一寸答辭に窮して居ると、黙つて居るのかと云はれる、イ、エ泰山となつて北斗を望むやうに思ひますと答へると、其思ふと思ふものは何ぢやと、一拶を加へられる、それが即ち佛性でせうと云ふと、ソナならそれを把握して來いと云はれる、イヤ自分では把握して居る積りだが、と思つて居ると、和尚は一指を高く舉げてこれが解るかいと云はれる、解ります無— | 即ち佛性を指してゐるのでせう、杓頭を指してゐるのでせうと答へると、左様だ杓頭とは面白い、ナゼ杓頭だと云はれる、私は小兒の時黄檗へ遊びに行つた其臺所に『意注杓頭』との木庵の軸が掛けてあつたのを覚えて居る、それで答へたのですと云ふと、能う



覺えて居たナ、と恰で慈父が愛兒の智慧を喜ぶ口調だ。

『意注杓頭』とは面白い、衲が黄檗へ行つたら一度讀んで來よう、昔時雪峰は杓子と杖を持つて歩いて、到處の僧堂で佗の嫌がる典座の役を勤めて回つた、或時飯を焚いて居ると湯氣の中から文珠が現はれた、これは十三天から惡魔が降つて雪峰を試鍊したのだと言傳へて居る、スルと雪峰は杓子を以て去れ〜と文珠を撲つた、又後に雪峰は其僧堂を董して三百の雲水此杓頭より救ひ用來るとか云ふて居る、『意注杓頭』も此意味が含んで居るのぢやらう、と話される。

芭蕉の古池の句に禪味があるとの事ですが、と其解釋を叩くと、衲は俳句は知らぬがこれは無字關を通つた時の句らしいナ、空々寂々ぢや、併し文字通りの空々寂々ぢややないよ真空だと説明せ

られる、昨夜雲水達が大聲で讀經せられて居たのは何ですと問ふと、アレは大般若を轉讀して居たのぢや、大般若六百卷は空の一字を説いたもので、衲が維僧の時師匠から解らぬ字があつたら空と讀んで置けと教へられたことがある、と話される、爐邊で薄茶を立て、これは衲が作つた茶碗ぢやと前へ置れる、喫了して茶碗の裏を見ると自知と銘がある、それは冷暖自知の自知ぢや、アハ、未だ蟬脱出來て居ない、モット自知して來いと云はれる、余は成程禪味には俳味があるナ、と思つた。

### 十、草庵の禪趣

僕は建仁寺塔頭の棲雲閣と云ふ古寺に間借して居る、北の庭面に梅の木が三本あつたが一本は舊時分に花屋へ賣られて、残りの

二本に此頃毎朝々々雀が啼いて居る、雀よりも鶯が来て啼きさうなものだが如何したものか此梅の木は二本とも雀に占領せられて居る、障子を開けて廻縁へ出ると逕を挟んで僧堂の庭も覗ける、赤椿が簇々と咲いて時々雲水達が梯子をかけて其花椿を剪んで居るを見る。

梯子かけて椿剪る僧塀の上

僧堂の起床は午前三時頃である、一番初めに太鼓の縁を叩いて一山大衆の夢を驚かすのだ、それから魚板が鳴る、ナゼ魚板を鳴らすかと云ふと、魚の眼は夜中でも明かにわいて居るとれで魚板を打つて僧の眠りを覺すのださうな。

春眠曉を覺えざるに魚板鳴る

雲水達の就眠は午後九時頃である、就眠と云つても禪堂で坐睡する位ゐるとださうな、此時もカン／＼と魚板が鳴ると大衆が一

同讀經をする、一人聲の美しい坊さんがあるので、聽けば黄檗から来て居る雲水とのとだ、此時分になると僕の娘もいつも眠たさにひづがる、ソレ坊さんがヨク泣く／＼とお經を讀んで居やはると云ふと、スグ泣き止んでホンにヨク泣く／＼と云ふて居やはるとして機嫌が直る、左様聞くと左様聞える。

泣聲にお經さかる、涅槃像

古寺の門を出ると一面の藪だ、此藪の中に梅雪村の墓があるさうなが、未だ一度も展墓したことはない、此頃此藪の向うの藪が少し拓けたので此邊も少し明るくなつた、併し尙千竿の緑竹が生茂つて居る、僕は朝夕出社と退社の途中此藪へ石を投げるのを日課にして居る、面白い、カチツ玉の音を發する、鳳鳴とはコンナ聲かと思ふ、心地が良い、これは香殿撃竹の公案三昧になるためだ、

昨今竹間に白梅が匂ふて石を打つと早や散りがてにちらく。

白梅の雪に降りけり春の雨

建仁寺の鴉、これは名物だけに朝夕々々の喧しき、鶯や雀の聲などはこれに壓倒せられてしばらく鴉の天地だ、仰山な鴉だナと大空を眺めて歸る時、藪の逕で出逢ふ紺園の黒い法衣の雲水達までをオヤ大きな鴉だナと思ふ事がある。

白梅に鴉がとまる禪寺かな

此枯木寒巖的の物寂びた建仁寺境内で、萬緑叢中紅一點の趣きのあるのは、時々極彩色の祇園の舞妓などが通行するとだ、此れは毘沙門や摩利支天へ參詣するので、此の舞妓を見て此々々真中が僕だナと其中を摺れ違ふて通るのがなか／＼面白い。

僧通り舞妓も通る涅槃の日

### 三、花 畠

僕の間借して居る禪寺の庭には、花が乏しいので淋しい、一つ花畠でも作りたいたいと思つて居る所へ、西洋花の種子を幾袋も貰つたので、丁度先月のお彼岸の前日ちや、隣から鍬を借つて来て朝早く庭の土を掘り起した、寺の事ぢやから此下から昔の髑髏でもヒョコリと出るかも知れんナと思ひつつ掘り起して居ると、茶の大黒頭巾を被つた隣の坊さんが花畠が出来ますかナと態々見に来られる、鈴付けた狎がついて来る、袴もお傳ひしませうと又別の鍬を持つて来て土を掘り返して呉られる、此坊さんは大佛に居られた時西洋花を畠一はいに作られた経験があるとの事ぢや、僕の鍬の先が飛んだので水に濡らしてお箒めなさいと教へて呉れ

られる、親切な坊さんぢや。

ちやんと短冊形の花鳥が出来た、嬉しい、嬉しいので早や花の種袋を椽先へ取出して来た、紫の夕顔もある、白の夕顔もある併しこれはお彼岸に播くのは早い、孔雀草金魚草は名からして美しさうぢや、紫白絞りの花葵、麝香すみれ、金蓮花、金蓮花は或西洋人の庭で見た事のある美しい花ぢやが、其西洋人は花壇を星ナなどと想ひ起して秋咲きの分ばかりを撰つて播き付けた、の形に作つて居た

種を播く暇に見るや花卉百圖

袋の花卉の圖を眺めては今播いた種が今スグ花が咲くとイふな  
 と思ふ、丁度播き付けたのが月見草、錦葉雞頭、美女撫子、千鳥草、水蝶花等二十餘種ばかりぢや、牡丹罌粟の種は顯微鏡下ぢやなければ解らぬほどの小さくである、播き了つてから一服吸う

と巻篋のそれもチェリーの旨味さと云つたら、併しコンナに花鳥を拵えて置いて、花の咲く時分に宿替えでも申し付かつたら何もならん、と人間はスグにコンナツマラヌ事迄を心配する動物ぢや。花鳥が出来てから、毎朝々々早く起きて一度苗が出たか出ぬかを検分せねば氣が濟まぬ、小兒にこゝを踏む事はならんぞと嚴命して置いても時々知らぬ間に小さい下駄の跡が印せられてある、誰が踏んだのぢやと小兒を叱りつゝ、小石の下にでもチョコと青いのが見えると早や苗が出て居るのやないか知らと小供も忘れて仕舞ふ、此花鳥の上に雨、曇、晴など測候所の天氣豫報を日々氣にするやうになつた。

昨今庭の緋桃も散り盡して木芽の緑が夥しく噴き出して居る、隣の坊さんも矢張り氣になると見えて時々見に来られる、花鳥に